
心暖まる場所

はなもも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心暖まる場所

【Nコード】

N3991D

【作者名】

はなもも

【あらすじ】

人事異動で同じ部署にやってきた優。幼い頃母親に虐待されたことのある舞は他人に心を開く事ができない。お互い心惹かれるが愛する事や愛される事に戸惑う舞。優と出会う事で心開いていくが…。

第1章：別れと出会い1（前書き）

初めて書いた小説ですので、つたない文章もあるかとは思いますが楽しんでいただけたらと思います。

一部幼児虐待を記載したシーンがあります。

ご不快に思われる方は、読まれるのをお止めください。

第1章：別れと出会い1

8月の終わりの土曜日。

夏の暑い日差しが照りつける外とは違い、長く居ると肌寒いくらい冷房がきいた店内で、男と女がテーブルをはさんで座っている。

テーブルの上に置かれたコーヒーには手を付けることなく、お互い少し下を向いていた。

すると、男の方が意を決したように顔を上げ口を開いた。

「別れよう」

男の言葉を聞いた後、女はコーヒーに手を伸ばし一口飲む。

今日、会いたいと言われた時なんとなく別れを告げられるのではないかと予感はしていた。

だから、驚きはしなかった。

「そう、わかった」

女がそう答えると、男は少し下を向きため息を吐いた。

「舞、君は俺のこと好きじゃなかったんだな」

そう言われて、舞は少し戸惑った。

確かに、『愛しているか』と聞かれたらそれは違うような気がするが、少なくとも相手に対して好意があったから半年間つきあっていたのだ。

「佐伯さん……」

「君は俺なんかといなくても一人でやっていける」

それだけを言うと、佐伯は財布からお金を出しテーブルに置き

「じゃ」

と一言言つて椅子から立ち上がり、店を後にした。

舞は店から出て行く佐伯の後ろ姿を見送りながら、小さくため息を吐いた。

『君は俺なんかといなくても一人でやっていける』

これで何回目だろう。

つきあつた人から言われた台詞。

確かに、かわいげのない性格なのは自分自身よくわかつているつもりだが、こうも同じセルフを別れ際に何度も聞くといいかげんイヤになってくる。

いままでつきあつた人はみんな向こうからつきあつて欲しいと言つてきているのに、いつも別れを告げられるのは、舞の方だった。

肩より少し長めの髪に、美人とは言えないが28歳という年齢より若く見える顔立ちは決して悪くなく、言い寄ってくる男は少ない。

舞は暑い中、人々が行き交う外の様子を窓から眺めながら、かつて別れを告げられた男達を思い出していた。

『もつと頼って欲しかった』

『僕より仕事の方が大事なんだね』

『なんで連絡くれないの』

『君には僕よりもつとふさわしい人がいる』

『君は僕を必要としていない』

別れ際に言われる台詞は、言葉は違うものの似たような台詞ばかりだった。

毎日の忙しい仕事の中、自分一人の時間も大切にしたいと思うと、彼氏と会う時間も限られてしまう。

そのうえ、舞は電話やメールはあまり得意ではない。

電話は相手にとって都合の良い時間なのかを考えているうちに、つい電話をするタイミングを逃してしまい、メールだとどんな言葉を送ればいいのかを悩んでしまう。

もつと気楽に考えればいいのだが、そんな性格を簡単に直せるもの

でもなく、結局相手を苛つかせてしまうのだ。

残っていたコーヒーを飲み干し、もう一度小さくため息を吐いた。

そして、会計を済まし店を出る。

外に出ると、夏の日差しが照りつけてきて店内との温度差に一瞬目眩を起こしそうになるのを、ぐっと堪え駅の方へ歩き出した。

しばらく歩いていると、ふと後ろから声をかけられた。

「そこのお姉さん」

振り向くとそこには長身の男が一人立っていた。

20代前半ぐらいだろうか、親しみやすそうな笑顔を向けながら

「俺とデートしない？」

ナンパ……。

「今、急いでいますから」

そう言うと、舞は再び駅の方に向かって歩き出した。

男は舞の隣で一緒に歩きながら、屈託のない笑顔で

「まあ、そう言わずに。男にふられた時はパーと遊ぶのが一番だよ」

舞は足を止め、男を少し睨んだ。

「盗み聞きなんてずいぶん趣味が悪いのね」

「イヤ、盗み聞きなんて……。隣の席に座っていたから自然と聞こえてきただけだよ」

少し申し訳なさそうな顔をしている。

「なら、ほつとしてもらえ。そんな気分じゃないの」

「でも、お姉さん泣いていたみたいだし」

泣いていた……？

私が……？

「どこをどう見ていたのか知らないけど、私涙を流した覚えはない」

「確かに涙は流れていなかったけど、でも泣いているように見えたんだ。ココが」

男は右手に拳を作り、親指を立て自分の胸を指した。

一瞬、言葉を失った。

自分で気づかないようにしていた心の奥を、言い当てられた気がしたから……。

「だから、俺とデートしよ」

いつもなら相手にするようなことはないのに。

なぜこんな返事をしたのかわからない。

ほんの気まぐれだったのかもしれない。

だけど、自然と言葉が出ていた。

「いいよ」

すると、男はうれしそうに舞の手をとり、駅とは反対方向へと歩き出した。

第2章：別れと出会い2

「俺、優。お姉さんの事は舞って呼んでもいい？」

「なんで名前知っているの？」

「だって、あの男の人、そう呼んでいたでしょ」

聞こえてきたと言っていたわりには、しっかり名前まで覚えているとは。

「何処に行くの？」

「心がスツキリする所」

心がスツキリする所って……。

しばらく一緒に歩いていると一件のビルの前に着いた。

「ココって……」

「ゲームセンター」

笑ってそう答えると、優は舞の手を引き中に入った。

そこは、ビル全体が複合施設になっているようで、1階にはゲームセンター、2階にはボーリング場、3階にはビリヤードや卓球、4階にはリラクゼーション施設があった。

ゲームセンターなんて何年ぶりだろう。

戸惑っている舞を気にする様子もなく、1台のゲーム機の前に立った。

それは、なんの変哲もない銃を画面に向かって撃つ対戦ゲームだった。

優は何か操作をすると、舞に銃を手渡し

「ほら、始まるよ」

えっ！

急に振られどうすればいいのかわからずに立っていると

「画面に敵が出てくるからとにかく撃ちまくって。早く！でないとやられちゃう！」

優の言葉にせかされ、あわてて画面に向かって銃を撃つ。

しばらくすると画面に『game over』という文字が出てきて、ゲームの終了を告げた。

「あー、負けちゃったあ」

優は悔しそうにしながら舞を見た。

「これって、お互いが協力しながら敵の基地に乗込んで味方を救出するゲームなんだ。まだ1回もクリアした事がなくて。悔しいから

もう一回やる！」

優はまたゲームに向かって操作を始めると、画面には『start』の文字が映し出される。

一体、これのどこが『心がスツキリする所』なんだろう。

疑問に思っていると、優は画面に向かって銃を撃ち続けながら

「舞、援護して！」

その言葉に、とにかく画面に出てくる敵を撃った。

撃って、撃って、撃ちまくと画面には『last stage』と映し出された。

「よし、あともう少し」

優の言葉になぜが緊張しながら、画面に銃を向ける。

画面の中では激しい銃撃戦が行われ、あと一步の所で仲間を救出出来そうところで、無情にも『game over』が表示されてしまった。

「くっそ！ やっぱ、簡単にはクリアできないなあ」

こんなゲームになにをそんなに悔しがっているのだろう。

子供のように悔しがっている優の姿を見て思わず笑ってしまった。

「やっと、笑った」

優はやさしそうな笑顔で舞を見る。

そんなやさしそうな笑顔を向けられ、ドキッとしてしまい目を逸らしてしまう。

自分よりも年下の子の笑顔を見て、動揺してしまっている自分に戸惑った。

そんな私を気にする様子もなく、優は舞の手をとって別のゲーム機の前に連れて行った。

今度のゲームは体全部を使って遊ぶ体感ゲームで、そこでも優はクリアできないと本当に悔しがり何度も一緒に再チャレンジをした。

そしてクリア出来ると、また別のゲームに移りひたすら遊んだ。

いつのまにか舞も夢中になっていて、クリア出来ないと優と一緒にになって悔しがり、クリア出来ると二人で喜んでいた。

一通り遊び終え、長椅子に座って休んでいると優が自動販売機でコーヒーを買いながら何処かに電話をしていた。

「疲れた？」

電話が終わると優はコーヒーを舞に手渡しながら隣に座る。

「本当は、スポーツでもやって体を動かす方が気分もスッキリするんだろうけど、それじゃ好き嫌いもあるし。ここだったら手軽にストレス発散ができるから」

ストレスの発散場所がゲームセンターだなんて若いなあと思いながらも、こうゆう発散方法もあるんだ。

こんなふうに何も考えずに楽しんだのは一体いつぶりだろう。

気がついた時には、佐伯さんの事は考えなくなっていた。

「よく来るの？」

「たまにね。スポーツだとしても相手が必要になっちゃうし」

優はコーヒーを飲み干すと立ち上がり、舞を振り返りながら

「体動かしたからお腹空いたな。夕飯食べに行こ」

外に出ると日はすっかり沈んでいた。

優は舞の手を取り街中を歩き出した。

今までつきあった人は年上ばかりで並んで歩いても手を繋ぐ事などほとんどなく、さりげなく手を繋ぐ優に戸惑いながらも、なぜか安心感と心地よさを感じていた。

今日初めて会ったばかりなのに、しかも年下の男の子と手をつない

でいるだけでこんな気持ちになるなんて。

ほんとにどうかしている。

考え事をしながら歩いていた舞に気づいたのか、優は心配そうな顔をしながら舞の顔を覗き込んだ。

「どうしたの？」

「うっん、なんでもない」

舞は慌てて顔を横に振った。

「そう、それならいいけど……」

そう言うと、優は手を挙げタクシーを止めた。

タクシーの扉が開くと、優は舞を先に乗せ自分も乗込み行き先を運転手に告げた。

「パークアットホテルまで」

第3章：別れと出会い3

行き先を聞いて舞は驚いて優の顔を見た。

パークアットホテルって、このあたりじゃ有名な高級ホテルじゃない。

ご飯を食べに行くのにどうしてそんなホテルに？

そんな舞を見て優はいたずらっぽい笑顔で

「べつに、襲うとかそんなんじゃないから安心して」

タクシーがホテルに着くと、優は料金を支払い私達はタクシーを降りた。

すると、優はまた舞の手を取りホテルの中に入っていく。

ホテルに入るとフロントの前を通りすぎ、エレベーターに乗り優は最上階のボタンを押した。

こんなにさりげなく手を繋ぐ事が出来る優に、舞はやはり戸惑ってしまう。

結構女性に慣れているのかな。

会ってからずっと笑顔でいる優はきつと母性本能をくすぐるだろうし、よく見れば童顔だけど目鼻立ちがはっきりしていて、女性にはもてそうな気がする。

そんな事を考えている内に最上階に到着し、エレベーターを降りた。
着いた所は雑誌にもよく掲載されている有名フレンチレストランだ
った。

ココつてすっごく高いんじゃない……。

舞は目を何度が瞬きをし、優を見る。

すると、優は少し笑ってそのまま舞の手を引きお店に入った。

「いらっしゃいませ」

「予約した杉原です」

「お待ちしております。こちらへどうぞ」

予約って……、一体いつしたんだろ。

不思議に思いながら案内された席に着くと、窓の外に釘付けになり
思わず声をあげていた。

「わあ、綺麗……」

窓の外は街全体の美しい夜景が一望できた。

自分の住んでいる街とはいえ、夜景を見るのは初めてで少しの間見
入っていると

「舞、そろそろ座つたら。でないとお店の人が困ってるよ」

夜景に見とれていた舞に、可笑しそうに笑いながら優が声をかける。ふと横を見ると、お店の人が舞の椅子を引いたまま待っていた。

舞は慌てて椅子に座り、優を見るとウェイターの人に話しかけている。

「今日はシェフのお任せで」

「かしこまりました。お飲物はどういたしましょう」

「料理に合うおすすめのワインをボトルでお願いします」

優が注文を終えるとウェイターは丁寧にお辞儀をし、去っていった。

「ねえ、大丈夫？」

「何が？」

「ココって高いんじゃないの。それに料理もワインもお勧めだなんて、一体いくらになるのかわかんないよ」

心配をしている舞に笑いながら右手の手首から先を上下に振る。

「心配いらないよ。こうゆうお店は従業員全員がプロだから、俺らの見た目から判断してそんな高い料理やワインは持ってこないって」

まだ心配そうにしている舞に、優は窓の外を見ながら

「それより、ここの夜景綺麗だろ」

その言葉に、舞も窓の外を見る。

しばらく二人で夜景を眺めていると、ウェイターがワインと前菜を運んできた。

ウェイターはワインをグラスに注ぐと、また丁寧にお辞儀をして去っていった。

「舞の失恋記念日に乾杯」

優は持ったグラスを私のグラスに当て、甲高い音が響いた。

「それって、なぐさめになっていないんだけど」

舞は苦笑しながら答える。

「だって、あの男の人にふられた事に傷ついてた訳じゃないでしょ？ どちらかというと、あの男の人に言われた言葉に傷ついていた気がするからさ」

優の言葉に舞は返す言葉もなく優から目を逸らした。

まただ。

最初に会った時もそう。

なぜ優は私の心の奥にしまっけてしまいたい気持ちをこうも簡単に言

葉にするのだろ。

あまり触れて欲しくない心の場所……。

「ここってよく来るの？」

舞は話を逸らした。

「いや、以前に一度知り合いに連れてきてもらった事があって。すごく夜景が綺麗だったからもう一度来てみたいなって思っていたんだ」

「そう、私はまた女性を口説くのにもいつもこのお店に来ているのかと思った」

冗談まじりで言う

「まさか！女性を口説くたびにこの店に来ていたら破産しちゃうよ」

「ふうん。そのわりには注文の仕方がずいぶん慣れているように思えたけど」

「そんなことないよ。慣れてないからメニュー見てもわからないと思ってお任せにしたんだ」

信用していないような目で優を見ると

「もしかして俺のこと、すっげー遊び人みたいに思ってる？」

「もしかしなくてもそう思ってる」

優は否定も肯定もせずただ笑っていた。

「それより、大丈夫？」

「なにが？」

「けっこう飲んでいる見ただけど」

そう言われ、ワインのボトルに目をやるとすでに3分の2が無くなっていた。

心の触れられたくない部分をみられないように、ついお酒のペースが早くなっていたようだった。

「結構お酒強いんだな。顔にも出てないし」

お酒は弱い方ではないが、強いかと聞かれるとザルと言われる程飲める訳でもない。

「人並みだよ。ただ顔に出ないだけ。もともと、お酒飲んでほんのり顔が赤くなる方が男の人にとってはかわいくみえるんだろうけどね」

少し嫌みっぽく言うと

「それって人によって違うんじゃない？俺はお酒好きだから一緒に飲んで楽しめる方が好きだけどな」

優は笑って答える。

まっ、そんな事言っけていても目の前にお酒で顔が赤くなった子がいれば、そっちに気がいっちゃうんだろうけど。

そんな事を思いながら、空になった自分のグラスにワインを注ぎ、飲んだ。

でも、確かに今日は飲み過ぎたかな。

普段ワインなんか飲まないから、ワインの適量も考えずに飲んでしまったような気がする。

そんな事を考えていると、最後のデザートが運ばれてきた。

デザートを食べ終え、少しゆっくりしてからお店を出ようと椅子から立ち上がると、少し足下がふらつきそうになり机に手をついた。

やっぱり、飲み過ぎたかな……。

お店を出るまでは気が張っていたのでちゃんと歩けたが、お店を出て廊下を歩いていると急に気分が悪くなり、手で口元を押さえながらその場に座り込んでしまった。

第4章：別れと出会い4

「気分悪いの？ 吐きそう？」

優は舞の両肩に両手を置いて心配そうにしている。

しばらく座り込んでいたが、吐き気が収まったので

「大丈夫」

そう言つて立ち上がり歩こうとしたら、また気分が悪くなって再び座り込んでしまった。

そんな舞の様子を見ていた優は急に舞を抱き上げ、エレベーターへ歩き出した。

驚いて慌てて降りようとしたが

「暴れないで。あまり暴れると落っこちそうになる」

そのままエレベーターに乗り込みボタンを押す。

エレベーターの扉が開いた場所は1階ではなく、客室がある階だった。

優はエレベーターを降りて廊下を歩き、部屋の扉の前に来ると舞を抱いたまま器用に鍵を開けた。

部屋の中に入ると、優はバスルームに行き舞を下ろし背中をさすっ

てくれた。

「吐けそうなら吐いた方が楽になるよ」

突然の事で頭の中が混乱していたが、それよりも気分の悪い方が勝ちその場に座り込んで吐いてしまった。

目が覚めると、見慣れない天井が目に入った。

ひどい頭痛がする。

頭を片手で押さえながら、だるい体を起こした。

ここ何処だろう…。

ふと人の気配がして、横を向くと隣に優が寝ていた。

えっ！

舞は焦って自分の服を確認する。

一応、ちゃんと着ている……よね……。

頭痛がする頭で、舞は昨日の事を思い出していた。

優と店を出た後、気分が悪くなってホテルの客室のバスルームで吐

いたんだっけ……。

で、その後は……記憶がない……。

私、一体なにやってるんだろう……。

大きなため息を吐きながら、時計を見るとA M 5 : 3 2を表示している。

優を起こさないようベッドから出て、ホテルに備え付けてある紙とペンをとった。

『 先に帰ります。 舞 』

手紙をベッドの脇のサイドテーブルに置き、部屋を出た。

二日酔いで駅まで歩くのはつらかったがタクシーを呼ぶには時間が早すぎた。

電車に乗り自分のアパートまでたどり着き鍵を開け部屋に入る。

頭痛はしていたが、とにかくさっぱりしたくてシャワーを浴びた。

シャワーを浴び終わると、タオルで髪を巻いたままベッドの上にダイブする。

それにしても、いろんな事があった日だったな。

今日一日の事を思い出していると、再び眠りについていた。

外の騒がしい音で目が覚め、時計を見ると16時を回っている。

よく寝たせいか、体のだるさも頭痛も和らいでいた。

窓のカーテンを開けると、アパートの前では引越し業者の車が去っていく所だった。

アパートに誰か新しい人でも入ったのかな。

そういえば、1階がたしか空き部屋だったような気がする。

そんな事を考えながら喉が乾いていた舞は台所に行き、冷蔵庫を開けペットボトルの水を一気飲みする。

二日酔いだつたわりには、この時間まで何も食べてないとお腹が空いてきていた。

しかし、さすがに重いものは食べる気がせず、仕方なく胃にやさしいおじやを作って食べる。

食べながら舞は黙ってホテルを出てきた事が気になっていた。

手紙だけ置いて帰ってきてしまったけど、良かったよね……。

お酒飲んで記憶がなくなるなんて今まで無かっただけに、記憶がないことがこんなにも不安になるとは思ってもみなかった。

それにしてもあのホテルの部屋……。

ホテルに着いた時にフロントに行くことはしなかったし、お店を出

た時もフロントに行かずそのまま部屋に向かったよね。

という事は、最初から部屋を取ってあったってこと？

それが目的で誘ったってことだろうか……。

いくら考えても答えは出ない。

もともとナンパで知り合ったのだから、部屋に誘うのが目的だったと言われてもいまだ驚かないけど。

ゆきずりの恋っていうわけじゃないけど、どうせ二度と会う事なんてないだろうし。

それに、なにかあったわけじゃないし……、多分……。

第5章：再会

翌日の月曜日。

会社に行き自分の席に着くと、真っ先にパソコンの電源を入れる。

パソコンが立ち上がっている間、給湯室でインスタントコーヒーを入れ再び席に戻ると、始業のベルが鳴った。

週明けは始業のベルが鳴るとグループごとに朝のミーティングが行われるのだが、その進行役の部長が席にいない。

不思議に思い前の席の同僚に声をかけた。

「園田さん、今日ミーティング無いの？」

「部長なら今人事部に行っています。戻ってきてからミーティングするって言っていました」

園田涼子はパソコンの画面から顔を上げ答えた。

舞より5歳年下の涼子は、明るく人なつっこそうな笑顔がとても似合い、誰とでも臆する事無く話の出来る性格は、社内の男性に人気がある。

「人事部？」

「今日、人事異動で本社から1人この企画部に来るって、週末に部長が言ってたじゃないですか」

週末……、そうだった……。

舞が少し首をひねりながら考えていると、涼子は思い出したように「あつ、そつか。その時七海さん打ち合わせで席にいなかったですよ。そう言えば七海さんに伝えておくよう部長に言われたのを忘れてた」

あまり申し訳なさそうにする訳でもなく、笑顔で答える涼子。

あつ……、そつ……。

人当たりはいいけど、忘れっぽいのがたまにキズだなあ。

「総務部の同期の子に聞いたんですけど、25歳で結構カッコいいそうですよ。楽しみです」

うれしそうに話しかけてくる涼子を見ながら、相変わらず情報が早いなあと感心していた。

人付き合いいい涼子はどこから仕入れてくるのか、上司である部長から話がある前に知っている事が多い。

そうゆうのも、ある意味才能なのかもしれない。

そんな事を思っていると、部長が部屋に入ってきたのが見えた。

涼子も気づいたのか、何事も無かったようにパソコンに向かって仕事を始める。

舞もパソコンに向かって仕事を始めていると、部長が席に着くなり

「ミーティング始めるから集まって」

10名程いる企画部の社員が一斉に席を立ち、部長の席に集まる。

舞もその輪の後ろの方に立って部長席に目をやると

あっ！

部長の隣に立っている長身の男性に釘付けになった。

なんで、ココにいるの？

「9月1日付けで本社からこの企画部に移動となった杉原君だ。じや、一言あいさつを」

部長の言葉に促されると

「杉原優です。今日からこの企画部に配属になりました。わからないことばかりで、皆様には御迷惑をおかけする事も多いとは思いますが、1日でも早く慣れるようがんばりますので、よろしく願います」

優は笑顔であいさつをし、お辞儀をした。

周りからの拍手が終わる頃、部長が先週までの仕事の経過やこれからの新しい企画内容などの話をしていたが、舞にはその言葉はまったく耳に入ってくることはなく、目眩がしそうになり近くの机に手

を着き、必死で堪えた。

よりによって同じ会社のしかも同じ部署……。

こんな事ってあるんだろうか……。

「……みさん、七海さん」

隣にいた涼子が舞の腕を指で突いていた。

ハッとして顔を上げると

「七海さん大丈夫かね。少し顔色が悪いようだが……」

部長がこちらを見ながら話しかけてきた

「ええ。大丈夫です」

必死で平常心を装いながら答えると

「そうか、ならいいが。杉原君が仕事を覚えるまでの間、君と一緒に仕事をしてもらうからよろしく」

ええっ！

混乱している所に追い打ちをかけるような一言が舞に向けられた。

「私と……ですか……？」

「ああ、今君が担当している企画、初めての仕事には丁度いいから

ね」

部長は優の方を向くと

「杉原君、仕事は七海さんから指示をもらってくれ。それと、君の机は七海さんの隣が空いているからそこが君の席だ」

「わかりました」

優が返事をする、ミーティングが終わりそれぞれの席に着く。

「後で紹介してくださいね」

隣にいた涼子は舞に耳打ちすると、自分の席に戻っていった。

あまりに突然の出来事に思考能力が停止し、その場に立ち尽くしていた舞に向かって優は歩き出し、舞の目の前まで来ると笑顔で右手を差し出した。

「よろしくお願いします。七海さん」

その言葉に促されるように握手をした。

「……よろしく」

握手をしたまま優の顔をジッと見つめて立っていると優はクスツと笑い

「七海さん、手」

えっ？

「そろそろ手を離してもらってもいいかな」

舞は慌てて優の手を離した。

「女性と手を繋ぐのは嫌いじゃないけど、出来ればプライベートの方がうれしいけどね」

屈託の無い笑顔向けられ、舞は思わず優から目を逸らして下を向いてしまった。

すると優は何事もなかったように

「ところで、僕の席はどこですか？」

その言葉に舞はようやく我にかえり、優を席に案内した。

優は自分の席に座ると、持っていた自分の荷物を机に整理し始めた。

だめだ、落ち着け！

とっ、とにかく仕事に集中しよう。

舞が自分にそう言い聞かせていると、前の席に座っていた涼子が小声で舞を呼んだ。

「七海さん！」

涼子の方を見ると、期待を込めた眼差しで舞を見ていたので、仕方

なく舞は優に声をかけた。

「杉原君、同じ部署の蘭田さん」

「蘭田涼子です。よろしくね」

涼子は立ち上がり、自分から手を出し満面の笑みを作っていた。

「よろしくお願いします。蘭田さん」

優は涼子と握手をしながら笑顔で答えると、荷物を片付け終えたのか

「仕事の指示をいただきましたのですが」

舞は自分の机の上にある資料を手渡し、これから作成する企画書の内容を説明した。

「出来たら声かけて」

「わかりました」

優の資料を受け取ると、説明を聞いていた時にとっていたメモとを見比べながらパソコンに向かった。

その様子は、まるで初めて会ったかのような態度だった。

もしかして……、気づいてないのかな。

舞は隣に座っている優を気にしながらも、先週末に残っていた仕事に手をつけ始めた。

第6章：記憶

終業のベルが鳴ると、帰る支度をする人や残業で残るためにしばしの休憩を取る人などで、周りが慌ただしくなった。

「今日は初日だし、定時で帰っていいよ」

「七海さんはまだ仕事ですか？」

「うん。もう少しだけやっていくつもり」

すると優は少し小首を傾げながら何か考えていたようだった。

「それなら僕ももう少しやっていきます。仕事のキリが悪いので」

そう言うと再びパソコンに向かってキーボードを叩き始めた。

「お先に失礼します」

定時から1時間程すると、涼子が帰宅の用意を始め部屋を出て行った。

それからさらに1時間程するとようやく書類が完成した。

社内には、週明けということで比較的残業をしている人もまばらだった。

隣の机では優がまだ仕事をしている。

「そろそろ帰るけど……」

「僕も今終わった所です」

舞と優はパソコンの電源を切り、一緒に会社を出た。

一緒に会社を出たので1人で勝手に駅まで歩いていく訳にもいかず、しかたなく一緒に駅まで行き電車に乗った。

その間、優は舞に話しかける事はなかった。

舞は記憶の無い部分の事を聞こうか迷っていたが、今日の会社での優の態度を考えると自分から話しかけるのもためらい、舞も黙っていた。

舞が降りる駅に着くとなぜか優も一緒に同じ駅に降りた。

まったく話をしていない2人の間には気まずい雰囲気漂っている中、優が口火を切った。

「なんで先に帰ったんだ？」

いきなり核心を聞かれて一瞬息をのんだ。

やっぱり気づいていたんだ！

「朝起きたら手紙だけが置いてあって。姿が見えなかったから心配したんだぞ！」

「う、ごめんなさい……」

不機嫌そうに話しかける優に思わず下向いて謝ると、再び沈黙が続く中、今度は舞から話しかけた。

「あ、あのさ。私……酔って吐いたあと……。いや……。やつぱり……。いいや」

口から出た言葉は最後になるにつれ、フェイドアウトしていく。

そんな私を不思議に思った様子で、

「もしかして、覚えてないの？」

「えっ……。いや……。覚えて……。るよ……」

優はジッと舞を見ていたかと思うと、ホッとしたように

「そう、よかった。忘れられたらどうしようかと思った。あんなに忘れられない夜は初めてだったから」

そう言うと今度はニヤツと笑って

「舞ってけっこう積極的なんだな」

優の言葉に驚いた舞は足を止め、その場に立ちつくし優を見つめた。

本当にそんな事をしたのだろうか……。

記憶が無いだけに反論できない……。

いや、そもそも積極的って……。

すると優は我慢できないといったように、いきなり笑い出した。

舞には一体、何が起きたのかわからない。

「なにもなかったよ」

なにも……なかった……？

それでもまだ状況を飲み込めないでいると

「あの時、ホテルのバスルームで吐いた後、そのまま便器抱え込んで寝ちゃったからベッドまで俺が運んで寝かせた。でも、シングルームだからベッドは1つしかないし、しょうがないから一緒に寝ただけ」

私、そのままバスルームで寝ちゃったんだ……。

「いくらなんでも、酔いつぶれた相手を襲うほど悪趣味じゃない」

優はいたずらっぽく笑顔作り

「わかった？ 忘れんぼさん」

そう言っつて優は舞のおでこを人差し指で軽く突いた。

「起きたら手紙だけが置いてあつて舞は帰った後で。あんな状態だったから心配してたんだぞ。だから、今のはそのお返し」

お返して……。

だんだん状況が飲み込めてくると、大きなため息を吐いた。

優って性格悪い……。

普通言わないでしょう、積極的だなんて……。

優は舞の顔を覗き込み

「ごめん。怒った？」

舞は首を横に振り

「怒ってないよ。迷惑かけたのは私だし。ごめんね、お礼も言わずに帰っちゃって」

「いいよ。心配したのは確かだけど出会い方が出会い方だったから、逃げられてもしようかなとも思っていたし」

逃げられてもって……。

確かに逃げるように帰ったけど……。

舞は再び歩き始めた。

「それにしてもビックリしたよ。まさか会社で会つとは思ってもみなかった。俺達の出会いって運命だったりしてな」

「偶然でしょ」

そっけなく答えたが、優は聞こえてないかのように

「会社で会った時の舞の顔、豆鉄砲くらったような顔をしてた」

と言いながら、さもおかしそくに思い出し笑いをしていた。

「それじゃ、私ココだから」

舞は自分のアパートに着いた事を告げ、優の方を振り向いた。

「ココなの？」

優は驚いた様子でアパートを見ていたかと思うと、クスツと笑って

「このアパート、俺も昨日から住んでる」

「……本当に？」

驚いて聞くと、優は真面目な顔をして

「うん。これは嘘じゃないよ」

ふと昨日引越し業者の車を見かけた事を思い出し

「昨日止まっていた引越し業者の車って……」

「ああ、本当は土曜の予定だったんだけど、手違いで日曜に引越
しになってしまって」

「それじゃあのホテルの部屋は……」

「土曜日にこっちに来たものの、部屋に何も無いんじゃないかと寝るにも寝られないから。しかたなくあのホテルに泊まったんだ。だけどホテルには早く着いて部屋に入れなかったから、街を探索してたまたま入った店に舞がいた」

フロントに寄ってないと思ったのは、すでにチェックインを済ましたからなんだ。

それにしても、アパートが同じとは……。

このアパートは舞が入社する時に会社からの紹介で入居したアパートだった。

それを考えると、空き部屋があれば社員が会社の紹介で入居する事も十分考えられる事だ。

「やっぱり俺達って運命なのかもな」

「偶然でしょ」

面白そうに言う優に、舞はまたそっけなく答え自分の部屋に向かった。

「それじゃ、おやすみなさい」

「おやすみ。舞」

優はやさしい声で答えた。

舞は部屋に入りベッドの縁に腰をかける。

疲れたなあ。

いろんな事が一度に起こったから頭がまだついてこない。

すると、ふと優の言葉が頭をよぎる。

『やっぱり俺達って運命なのかな』

運命かあ……。

舞は首を横に振た。

ただの偶然だよ。

第7章：幹事

次の日の朝、会社に着くとすでに優は来ていた。

舞はいつものようにパソコンが立ち上がっている間に、給湯室に行きインスタントコーヒーを入れ席に戻る。

「七海さん」

後ろから声を掛けられ振り向くと、同じ部署の坂崎が立っていた。

「杉原の歓迎会今週の金曜日に予定しているんだけど、俺来週までに仕上げないといけない企画があって、参加できそうにないんだ。

悪いけどさ、今回だけ幹事変わってもらえないかな。さすがに飲み会の席で幹事不在じゃカッコつかないだろ」

幹事は1年単位の持ち回りで、今年は2年先輩の坂崎が担当だった。

仕事が忙しいときはみんなお昼休みを削って仕事をすることもあり、仕事の期限が迫っているのでは確かに歓迎会の準備等は大変だろう。

「でも、なんで私なんですか？」

舞自身にもいくつか急ぎで仕上げないといけない仕事があった事を思い出しながら聞いた。

「おまえ杉原の教育担当だし、仕事も杉原に手伝ってもらえるから、少しだったら時間とれるんじゃないか？」

確かにそれはそうだけど……。

「なっ、頼む！ 助けと思って！」

坂崎は顔の前で拝むように手を合わせ、頭を下げた。

さすがに、先輩にここまで言われると断るに断れなくなってしまい、心の中でため息を吐いた。

「わかりました」

「悪いな。今度埋め合わせするから」

そう言つて、坂崎は自分の席に戻つていった。

面倒くさいなあ。

優に仕事を手伝ってもらえるとはいえ、参加の確認やお店の手配などやらなければいけない雑用が増えてしまった。

「杉原君。今週の金曜日って何か予定ある？ 歓迎会をしようと思つているんだけど」

「そうなんですか？ わざわざありがとうございます。その日でしたら大丈夫です」

舞が優に話しかけると、優はとても丁寧な返答をした。

「そう。じゃ、また詳細がわかったら言うね」

「よろしく願います」

昨日の帰り道とは全然違う態度に舞は少し驚いたが、一応社会人として会社とプライベートの区別はつけているようだった。

お昼休み、昼食を食べ終わり歓迎会のお知らせメールを作成していると涼子が席に戻ってきた。

「蘭田さん、金曜日に杉原君の歓迎会をするんだけど、何処かお勧めのお店ないかな」

涼子は社内の情報だけでなく、最近の流行やおいしいお店などにも詳しい。

自分でお店を探すより確実だった。

涼子は少し考えていたようだったが、思い出したように

「2、3ヶ月前に、会社から15分ほど歩いた所に創作料理店が出てきたみたいです。まだ私は行った事無いけど、個室とかもあるっていう話だから丁度いいと思いますよ」

「どの辺り？」

「消防署の近くだったかな」

へえー、そんな所に新しいお店が出来たんだ。

「じゃ、そこにしようかな」

「本当ですか？　おいしいっていう話だから1度行ってみようと思
っていたんです。」

涼子が楽しそうに話す。

「お店の名前わかる？」

「うーん。なんだったかな……。教えてくれた人に聞いてみますか
らちょっと待ってください」

涼子は携帯でメールを作成してどこかに送信しているようだった。

舞は再びパソコンに向かって歓迎会のお知らせメールを作成してい
ると、涼子の携帯にメールの着信音が鳴った。

「夢幻坂って名前だそうです。お店の電話番号は……」

涼子が電話番号を読み上げ始めたので、慌ててメモをとる。

「ありがとう」

舞は涼子にお礼を言うと、お店の電話番号をメモした用紙と携帯を
持って廊下に出た。

お店に電話をして金曜日の予約を取り、電話を切ると不意に軽く肩
を叩かれた。

「よっ！　久しぶり。元気してた？　舞ちゃん」

振り向くとさわやかな笑顔をした新見良太が立っていた。

「新見主任……」

「何してんの？」

「新しく企画部に配属になった杉原君の歓迎会の予約を、お店に電話していたんです」

「なんだ。俺はまた彼氏にラブコールでもしているのかと思った」

「彼氏だなんて、いませんよそんな人」

慌てて否定すると良太は艶やかな笑顔を作り私の顔に自分の顔を近づけてきた。

「じゃ、俺にもまだチャンスは残ってるってことだな。どう？　そろそろ俺とデートしてくれる気になった？」

「私なんかとデートしなくても、新見主任にはたくさんいらっしゃるじゃないですか」

舞は良太が近づいてきた分だけ後ずさりをしながら答えた。

甘いマスクに長身のすらりとした体型。

ジムに通っているのだろう、ワイシャツの上からでも鍛えているのがよくわかる。

いつも笑顔を絶やさず誰とでも気軽に話をし、話題も豊富な良太はいかにも営業といった感じだ。

35歳にして今だ独身の良太が、女子社員に人気がある理由の一つでもある。

「そんなのは全部遊びさ。真剣に誘うのは舞ちゃんだけよ。俺はいつでもOKだから」

「七海さん、何やってるんですか？」

声のする方を見ると、良太の少し後ろに優が立っていた。

第8章：苛立1

声のする方を見ると、良太の少し後ろに優が立っていた。

良太は舞から離れ優の方を振り向く。

「君は？」

良太の言葉に舞は優の紹介をした。

「ああ、君が噂の男前君か」

男前君……？

「社内の女の子達が噂してた。本社から企画部に配属になったヤツがカッコいいって」

良太は優を観察するように見ると

「なるほどね。確かに女の子達が噂するだけはあるな」

その時、お昼休み終了5分前を告げるベルが鳴った。

「おっと、時間切れた。それじゃ舞ちゃん、俺とのデート真剣に考えといてね」

良太は優しい笑顔を舞に向けながらウィンクをし

「またね、男前君」

優の肩をポンと叩きその場を去っていった。

「誰、あれ」

あまりにも素っ気ない言い方に思わず舞は周りを確認したが、もうすぐお昼休みが終わるこの時間は、急いで自分の席に戻る人ばかりで舞達の事を気に留めている人は誰もいなかった。

「営業部の新見主任」

「デートするの?」

一体どこから話を聞いていたのだろう。

「まさか!」

「舞ちゃんとか呼ばれてずいぶん親しげだったけど」

「あの人は社内の女子社員を名前で呼んでいるの。デートの誘いにしたっていつもの事で、新見主任にしたら挨拶代わりみたいなものだよ」

実際良太は舞に会ったびにデートに誘ってきていた。

しかし、他の女子社員にもよく声をかけている姿を見かけ、舞にしてみれば良太にデートに誘われるのは挨拶代わり程度にしか捉えていない。

「ふーん」

それだけを言うと優は自分の席に戻っていった。

どうしたんだろう、なんだか機嫌が悪そうに見えたけど。

疑問に思いながら、自分の席に戻ると丁度お昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

結局お昼休みにメール作成出来なかったな。

仕方ないから定時後作成しよう。

そんな事を考えていると、優が声をかけてきた。

「七海さん次の仕事の指示をお願いします」

その口調は先ほどとは違いまったく普通だった。

機嫌が悪そうに見えたのは気のせいだったのかな。

定時になり、歓迎会のお知らせメールを作成し終わり各人へ送信し終えた時

「七海さん」

隣に総務部の相原友香が立っていた。

「明日急に出張が決まっちゃって、申し訳ないですけど明日の部長会議のお茶汲みお願いできないですか？」

毎週水曜日は各部署の部長が集まっての部長会議が行われる。

女子社員が持ち回りでコーヒーを出す事になっていて、仕事の都合等で担当している日にお茶汲みが出来ない場合は、他の女子社員に変わってもらう事がある。

頼む相手は仲のいい同僚や会議の時間に仕事の都合がつきそうな人に変わってもらうのだが、舞はよく頼まれる事が多い。

またか……、と思いながらも出張や打ち合わせなどの理由では無下に断る事も出来ず

「わかった。出張じゃ仕方ないよね」

「いつもすみません。よろしくお願いします」

そう言うと、友香足早に去っていった。

幹事といいお茶汲みといい、今日は雑用をお願いされる事が多いな。出来ればどちらに進んでやりたい訳ではないけど、お願いされると断る事が出来ないのをみんなわかっていて頼みに来ているのだ。

そして、舞もそれをわかっているが結局断れず受けてしまう。

そんな事を考えていると、舞は隣からの視線に気づき振り向くと優がこちらを見ていた。

「仕事、終わったの？」

「いえ、何でもないです」

と言ってパソコンに視線を戻した。

何だったんだろう……。

お昼休みもそうだったけど、今日の優の態度は腑に落ちない。

疑問に思いながらも仕事を始めてしまった優に、次の言葉をかける事が出来なかった。

キリのいいところまで仕事を終え、時計を見るともうすぐ22時になるところだった。

22時を回ると深夜残業となる為、出来るだけ22時までに帰宅するよう会社から言われている。

舞と優は仕事を終え一緒に帰宅した。

話しかけてくる事も無く黙ったままの優に、舞も自分から話しかける事が出来ず二人は黙って一緒に歩いていた。

アパートの近くまで来ると優は

「何で断らないの？」

何の事を言っているのかわからず優の顔を見上げると

「今やっている仕事も期限まであまり時間がないみたいだし、幹事もお茶汲みも舞が断らないのを知ってて雑用を押し付けているんだ

る」

その口調は怒っているようだった。

「仕事の期限が迫ってたり出張とかだと仕方がないでしょう。こういう事はお互い様だから」

確かに面倒だし期限の迫っている仕事はあるけれど、担当している人が出来ないのなら誰かが代わりにしないとイケない訳だし。

なぜ優がそんな事を言い出すのかわからず困惑していると

「舞ってさ、周りの顔色伺い過ぎなんだよ」

「そんなこと……」

舞は立ち止まり言い返そうとしたが、本当の事を言い当てられて最後の言葉は濁してしまた。

「俺の事だって仕事を覚えるまで押し付けられたようなものだし」

えっ！

なんでそんな事を言うのだろう。

優の言葉の意図がわからず、困惑したまままだ優を見つめていた。

「それにあの時だって」

あの時？

「男に振られた時だって、なんで相手に自分の思っている事を言わなかったの？」

優は睨むように舞を見ていた。

「なんで、いつも自分の気持ちを心の中に押し込んで」

まただ。

これで何回目だろう。

どうして優は私の触れて欲しくない部分を言葉にする。

舞は瞼を閉じて下を向いた。

優はそんな舞を気にせず話し続ける。

「周りに気を使って、自分の気持ちに蓋をして気づかないふりして」

やだ、聞きたくない！

舞は涙が溢れてくるのをグッと堪えた。

「そんな風に自分の気持ちに偽っていると、いつか心が悲鳴をあげるよ」

「やめて！」

優の最後の言葉を遮るように舞は叫んだ。

「私がどうしようとあなたに関係ないでしょう！」

舞は走り出すと、堪えていた涙が頬をつたって流れ出す。

舞は部屋に着くと急いで鍵を開け部屋に入り、鍵をかけるのも忘れて玄関先に座り込んだ。

優の言う通り、舞はいつも自分の気持ちを口にするをこなすことが出来なかった。

いや、出来なかったと言った方が正しい。

舞の育ってきた環境が自分の気持ちに我慢する事を覚えてさせていた。

それが、舞の生きる為の術だったから。

『お前なんか生まなければ良かった』

『お前がいなければ私はもつといい人生を送れたのに』

『邪魔な子だよ、まったく！』

思い出したくない言葉が、頭の中に蘇ってくる。

幾度となく流れてくる涙を止める事無く、舞は耳を塞いだ。

『ごめんなさい……、……ごめんなさい……』

舞は心の中で呟いた。

生みの母親から言われた言葉が舞の心の中で重しのようになるのしかか
ってくる。

第9章：苛立2

優は舞の走り去ったその場所に立っていた。

なぜ、舞にあんな事を言ってしまったのか。

優は瞼を閉じ夜空を仰いだ。

泣いてた……よな……。

涙を溜めていた舞の瞳が瞼に焼き付いている。

舞に言った言葉は自分の苛立を八つ当たりしたものでしかなかった。

舞の事が気になった優の足は自然と舞の部屋へと向かう。

部屋の前に着き、チャイムを押したが返事がなく、外廊下から見える限りでは部屋の電気もついていない。

優は部屋のノブを回すとドアが開いた。

そつと中を覗くと玄関先で両手で耳を塞ぎながら座り込んでいる舞の姿があった。

「舞！」

優は後ろから両手を舞の肩に置き名前を呼んだ。

舞は顔を上げ優を見たが、その目は虚ろで目の前にいる優が見えて

いないようだった。

舞をここまで追いつめたのが自分だという事に自己嫌悪に陥りながらも、優は舞を抱き上げ部屋に入る。

ベッドの縁に舞を座らせ、優は隣に座り舞の両肩に手を置き、もう一度優しく名前を呼んだ。

「舞」

舞は体をビクツとさせ、ゆっくりと優の方を見た。

「……すぎ……はら……くん……」

舞はジッと優の瞳を見つめ小さく呟いた。

優は舞をそっと抱きしめた。

「さつきはごめん。俺ちよつと苛ついてて八つ当たりしてた」

舞は小さく頭を横に振った。

「大丈夫…… 大丈夫だから」

舞はそっと優を押し戻し離れた。

「ごめんね。心配かけて」

その瞳にはもう涙は流れていなかった。

優の右手が舞の頬に触れる。

「大丈夫なんかじゃない。まだ、つらそうな顔をしてる。俺が泣かせてしまったのにこんなこと言うのは変だけど、　　つらいんだつたら我慢せず泣いた方がいい。俺でよければいつでも胸を貸すから」
もう一度舞を抱きしめる。

こんなにもつらそうなのになっている舞を放っておく事は出来なかった。

「離して……」

舞は優の腕を振りほどこうと少し抵抗したが、優は離さなかった。

「こうしていれば、顔を見られることもないだろ。好きなだけ泣けばいい。　　舞が落ち着くまでずっとこうしているから」

まだ抵抗していた舞だが、優の腕が振りほどけないとわかれると抵抗をやめた。

そして声は出していないが舞は泣いているようで、優は舞の髪を優しく撫でた。

しばらくすると舞は寝てしまったようだった。

優はベッドに寝かせ舞の顔にかかった髪をかきあげる。

頬をそっと撫で、目からこぼれ落ちた涙を親指で拭いた。

声さえ出さずに泣くなんて、一体どれほど大きな心の傷を背負っているのだろうか。

自分の不用意に言ってしまった言葉で傷つけてしまったことが悔やまれた。

今日の昼休み、優は社員食堂でお昼を食べていると

「ココいいかな」

顔を上げると蘭田涼子が立っていた。

その脇には相田友香もいる。

「どうぞ」

涼子と友香は優の対面に並んで座り、涼子は友香を紹介した。

「私の同期で総務部の相原友香」

優は初めましてと挨拶をした。

「杉原君って本社から来たんでしょ。将来的には本社に戻るの？」

友香が箸を手に取りながら聞いた。

「うーん、どうでしょうね。今後希望する部署にもよると思うので先の事はわかりません」

優が答えると涼子は

「杉原君、敬語使わなくていいよ。私達歳そんなに変わらないから」

「そうなの？」

「うん。2人とも24。今年25になるの」

「そう、じゃ同じ年だね」

「仕事の方はどう？」

涼子が聞くと

「まだ2日目だから仕事の全容がつかめてないけど、1人で仕事が出来るとなればきっと面白いだろうなって思う。やりがいもありそうだし」

「誰が教育担当なの？」

「七海さん」

友香の質問に答えたのは涼子だった

「ああ……。七海さんね」

その少し含みのある言い方が気になり優は聞いた

「七海さんてどんな人なの？」

「いい人だよ」

涼子と友香は一瞬目を合わせ、涼子が答えた。

「いい人すぎて貧乏くじ引いちゃうタイプ」

「貧乏くじ？」

友香の言葉に涼子が軽く肘を突くと、友香はあっ！といった態度をとった。

しかし時既に遅しで、優の質問に言いにくそうに涼子が説明する。

「ほら、今日の朝も坂崎さんに歓迎会の幹事頼まれてたでしょ？」

七海さんて何か頼むと基本的断らないから。ついみんな頼っちゃうの。杉原君の教育担当も本当は他の人が担当する予定だったけど、その人がどうしても仕事の都合がつかなくて、結局七海さんに決まったの」

「あんまり自分の感情表に出さない人だから、たまに何考えてるかわからないけどね」

涼子は再び友香を肘で突き、涼子は付け加えるように

「あっ！でも、勘違いしないでね。みんながついお願いしてしま
うのは、七海さんは仕事が丁寧で責任感のある人だからで……」

「じゃ、頼りがいのある人なんだ」

優の肯定的な言葉に涼子はホッとしたようにしていた。

「じゃ、僕はこれで失礼するね」

昼食を食べ終えた優は立ち上がり、手にトレーを持つと涼子が

「杉原君、今度一緒に飲みに行こうよ」

「そうだね。機会があれば」

優の言葉に涼子と友香はうれしそうに目を合わせていたが、優は歩き出しながら舞に初めて会った時の事を思い出した。

よくある男と女の別れ話。

さして興味は無かったが、暇だった優はどんな展開になるのかと眺めていた。

ストレートな言葉で別れを告げられた舞は、泣き出したり怒ったり言葉でなじったりするのかと思っていたがあまりにもあっさりと別れを承諾していた。

しかし、男が店を去った後の舞は窓の外を見ながらそのまま消えてしまうのではないかと思うほど儚く見えた。

第9章：苛立2（後書き）

ご愛読ありがとうございます。

まだまだ連載は続きますが、完結にむけてがんばります。

小説を気に入っていただけた方はぜひ下記のネット小説ランキングへ、投票をお願い致します。

第10章：過去1（前書き）

幼児虐待のシーンがあります。

不快に思われる方は読まれるのをお止めください。

第10章：過去1

- - 舞5歳 - -

真つ暗な部屋の中、喉の乾きで舞は目が覚めた。

母親の美樹はまだ帰って来ていないのだろうか、2間あるアパートは静かだった。

美樹が帰っていれば台所へと続く隣の部屋の襖を夜開けることはないのだが、居ないのであればかまわないだろうと、隣の部屋へと続いている襖を開けた。

すると、舞の目に映ったのは知らない男の下に抱かれキスをしている美樹の姿だった。

2人は服を着たまま濃厚なキスを繰り返していたが、襖が開いた事で美樹を上から覆い被さるように抱いていた男が振り返った。

男は驚いたように美樹を見下ろし

「お前、子供いたの？」

美樹はばつの悪そうな顔をした。

しばらくの沈黙の後

「悪い、俺帰るわ」

男が起き上がると、美樹は慌てて男を引き止めた。

「この子の事なら気にしなくていいから」

「俺、ガキは嫌いなんだよ」

男は振り向きもせずそれだけを言うと部屋を出て行った。

扉の閉まる音がすると美樹は睨むように舞を見る。

舞を睨んでいる美樹の目は、生みの親だとは思えない程冷たく鋭いものだった。

舞は竦み上がり、その場に立ちつくす。

「まったく！ いつも邪魔するなって言ってるでしょ！ 人の邪魔ばかりして、お前なんか生むんじゃないかった！」

殴られる！

とつさに身構えたが、美樹はヒステリックに叫びながら右足で舞の肩を蹴り飛ばした。

女性とはいえ大人に蹴り飛ばされ、体の小さい舞は勢いよく尻餅をつき後ろに1回転する。

そして追い打ちをかけるように、美樹の平手が舞の頬を叩く。

殴られた方の頬に手を当て恐怖に身を縮めている舞を、美樹は腕を組んで見下ろし

「お前のせいで私がどれだけ迷惑していると思ってるの！　タダ飯食わしてやってるのに恩を仇でかえしやがって！」

それだけを言うと美樹は乱暴に襖を閉めた。

舞は座り込んだまま溢れてくる涙が止まらなかった。

しかし、決して声を上げて泣くような事はしない。

泣き声が聞こえれば、また美樹に殴られるのではないかという恐怖感があつたからだ。

舞は溢れ出る涙をパジャマの袖で必死に拭いながら、「ごめんなさい」と心で呟いていた。

目が覚めた時、ベッドの横では優が座ったままベッドの縁に上半身を預け俯せの状態で寝ていた。

夢か……。

小さい頃の嫌な思い出……。

舞は上半身を起こすと優は気づいたようで

「起きた？」

「ありがとう、ずっと居てくれたんだ」

手に違和感を感じ目線をやると、優はずっと舞の手を握っていたようだった。

舞の目線に気づいた優は手に少し力を込め、片方の手を舞の頬に触れた。

「まだ少し辛そうだな」

舞は顔を横に振った。

「もう、大丈夫だよ。明日も仕事だし、もう帰った方がいいよ」

「俺のせいで嫌な思いさせたんだ。ほっとけない。それに……舞の大丈夫は信用出来ないから」

クスツと笑う優につられて、舞もつられて少し微笑むと

「ようやく笑った」

優はホツとしたように言った。

「舞、携帯出して」

「携帯？」

「そう。舞の携帯」

舞はベッドの脇に置いてあったバックを手に取り、携帯を取り出し優に手渡した。

何をするのかを見ていると、舞の携帯で何か操作をすると2種類の着信音が1回ずつ鳴った。

「俺の携帯番号とメルアドが発信歴とメール送信に記録されているから。何かあったら連絡して」

そう言つと優は舞に携帯を返した。

「少し元気になったみたいだから、俺帰るね」

舞は玄関先まで送り、優は靴を履き終えると舞の方を見て

「今日は、ホントにごめんな」

「そんなに気にしないで、杉原君が悪い訳じゃないから」

優はジッと舞を見た後に、右手を舞の頭の後ろに添えると軽く唇を重ねた。

「今日のお詫び」

舞は一瞬何が起こったのかわからず佇んでいたが、状況が飲み込める頃には優はドアの鍵を開け出て行った後だった。

第11章：過去2（前書き）

本日2回目の更新です。

第11章：過去2

金曜日の定時後、幹事である舞は終業のチャイムが鳴るとすぐ片付けてお店に向かおうとした時

「七海さん、電話。内線1番」

急いでいる時に限って……。

「僕、待ってます」

場所のわからない優は舞と一緒に店まで行く事になっていた。

「よかったら、私と一緒に行く?」

「じゃ、そうして。電話が終わったらすぐ行くから」

涼子の言葉に舞がそう言うと、優はそれでも待ってしようとしたが、主役が遅れる訳にもいかず、涼子と一緒にお店に向かった。

舞は電話に出、5分程で切り上げお店に向かった。

お店に着くと、すでに全員集まっており

「幹事、遅いぞ」

舞は一言謝りながら扉に1番近い下座の席に座る。

優は上座の席に座り、隣には涼子が座っていた。

歓迎会が始まると優は一言挨拶をし、その後みんな好きに飲み始めた。

舞は周りの同僚としやべりながらも、お酒等を注文したりと忙しく幹事の仕事をしていた。

歓迎会が終わると各々は2次会に繰り出す人や帰る人に別れる。

舞はいつも2次会には行かず帰っていたので、2次会に行く同僚に帰る旨を伝え夜の街を駅に向かって歩き出す。

駅まで歩いている途中に舞の携帯電話の着信音が鳴った。

着信表示を見ると・・・宮沢夏樹・・・と表示されている。

8歳年下の舞のはところである。

「もしもし、舞ちゃん。今電話いい？」

大丈夫な事を伝えると

「来週の土曜日にお父さんの誕生会をしようと思ってるんだけど、舞ちゃんその日何か用事ある？」

ああ、そんな時期か……。

「特に何も無いよ」

「じゃ、誕生会来れる？ 最近舞ちゃん家に来てなかったからお母

さん喜ぶと思う。時間は18時位から始めようと思うんだけど」

うれしそうな声が電話の向こうからしているが、電話を早く切りたい舞は短く返答をした。

「わかった。それぐらいの時間に行くから」

「うん、待ってるから。バイバイ」

電話を切ると舞は小さくため息をついた。

行きたくないけど行かない訳にはいかないだろう。

舞の母親は舞が中学に入学してすぐに男と蒸発した為、母親のいとこである宮沢家に引き取られ、高校を卒業するまでの6年間そこで過ごした。

父親は舞が1歳頃に離婚しているから顔すら覚えていない。

19歳で舞を生んだ美樹は母親らしいことは一切したことがなかったし、そもそも愛情というものを持ち合わせていないかのようだった。

美樹は当時つきあっていた1歳年上の男性、誠の気持ちが始めて他の女の所へ行ってしまいそうになった時、妊娠がわかり誠をつなぎ止める為だけに舞を生んだ。

お腹に宿った小さな命に愛おしむ気持ちがあつた訳では決して無い。生む事を周りに猛反対され、父親である誠にも墮すよう説得された

が、美樹は頑に生むと言い張った。

しかし、なかなか結婚の承諾をしない誠に業を煮やした美樹は、誠の両親に直接泣きつきようやく結婚に至った。

これで誠は自分の元に帰ってくると安堵した美樹だったが、もともと遊び好きで女癖も悪かった誠は次第に家に帰ってくる事が少なくなる。

それでも子供が生まれれば帰ってくるのではという淡い期待を持っていたが、美樹が出産で里帰りしている2ヶ月の間、子供の顔を見に来たのは生まれてすぐの1回だけだった。

そんな結婚生活が長く続く訳も無く、結局は離婚してしまう。

離婚して誠が離れてしまうと、美樹にとって舞は邪魔な存在でしかなかった。

周りの友達が遊んでいるのに子育てに奔走していることがだんだんバカらしくなり、舞を自分の母親に預け毎日遊ぶ日々が続いた。

祖父は体の弱い人で早くに病気で亡くなった為、祖母が1人で舞を育ててくれた。

祖母は舞の事をとてかわいがっていたが、舞が5歳の時に心臓発作で急死する。

美樹は仕方なく舞を引き取ったが、コンビに弁当だけを置いて夜の仕事や遊びに出かけ、真夜中過ぎに帰宅する毎日だった。

泥酔状態で帰ってくる時であれば、男を連れ込み舞が朝起きると知らない男の人が美樹と一緒に寝ている姿をよく見かけた。

気がつくと美樹の彼氏が一緒に住んでいる事もしばしあり、付合う相手によっても舞への接し方も違う。

子供嫌いな人と付合った時は最悪で、邪魔者扱いするだけでなく気に入らないと殴られ食事も与えられない時もあったが、逆に子供好きな人と付合った時などは普段の態度が嘘のようにととても優しく、物を買ってくれたり一緒に遊びに連れて行ってくれる。

しかし、別れば決まってお前が居たから男が離れて行ったと舞殴った。

そんな時は黙って耐え、暗い部屋の中小さく体を丸め一人で声を出さずに泣く。

ただ感情を押し殺し黙って耐える日々は、美樹が蒸発するまで続いた。

第12章：生まれてきた意味

舞はアパートの最寄りの駅ではなく一つ手前の駅で電車を降りた。

慣れた足取りで道を歩くと1件の店に辿り着いた。

看板には“スナック 秋桜”と書いてある。
こすもす

舞は迷う事無く店の扉を開ける。

薄暗い店内はカウンターとボックス席があり12人程が座れるようになっていた。

中に入るとまだ早い時間なのかカウンター席に2人の客が座っているだけだった。

「あれ、舞。連絡もなく来るなんてめずらしいね」

カウンターの奥から結衣は驚いたように声をかける。

「あら、舞ちゃん。久しぶり」

「お久しぶりです」

店のママの言葉にぺこりと頭を下げた。

「おお、舞ちゃん久しぶり。全然顔見ないから心配してたんだよ」

「お久しぶりです。お元気でしたか？」

カウンター席に座っている客が話しかけてきたので、舞は挨拶をした。

“スナック 秋桜”は舞の中学時代の同級生、藤倉結衣の母親が経営しているお店だ。

店は結衣と結衣の母親の2人でお店を切り盛りしているが、忘年会シーズンや歓送迎会の季節になると人手が足りない為、舞も応援でお店を手伝ったりもしていたので顔見知りの常連客が何人かいる。

「舞、先に部屋に行つて。すぐ行くから」

舞は結衣から渡された鍵を持って店を出た。

外階段を上り同じ建物の2階にある扉の鍵を開け中に入った。

1階がお店で2階が住居部分になっている結衣の家は、中学の時から遊びに来ている舞にとっては勝つて知つた家でもある。

結衣の部屋に入り電気を付け床に座る。

しばらく待っていると、結衣が缶ビールを持って部屋に入つて来た。

缶ビールを舞に手渡すと結衣も床に座りプルトップを開けた。

「お店、良かったの？」

舞もプルトップを開け結衣に聞いた。

「まだ時間が早いし、忙しくなったら連絡があるから大丈夫だよ」

結衣は一口ビールを飲むと

「それで、何があつたの？」

中学からの付き合いである結衣は舞の親友で、舞の家の事情を知る唯一の人物だった。

だからこそ、舞の突然の来訪に何かあつたと察したのだろう。

舞は優との出会いからキスをされた事まで話した。

「へー、やるね。その年下君」

結衣は残っていたビールを一気に飲み干すと、面白そうに言った。

「つきあちゃえば」

「つきあちゃえばって……。別に告白された訳じゃないし」

「でも、キスするってことはそれなりに好意があるからでしょ。舞はその年下君の事どう思ってるの？」

結衣の言葉に舞は優の暖かい手を思い出した。

人に体を触られる事にとっても抵抗を感じる舞だが、優に握られた手に安心感と心地よさを感じたのも確かだったし、抱きしめられた時は最初は驚いて抵抗したが次第に安堵感が湧き上がってきて、

気がついたらいつのまにか優の腕の中で眠っていた。

それは、今まで付合って来た彼氏には感じた事の無い感情でもあった。

しかし、初めての感情に戸惑っている自分がある。

「よくわかんない。一緒にいて安心感を感じたけど、それと同じ位怖さも感じた」

「まあ、あんたの生い立ちを考えるとトラウマから抜け出せないのはわからないでもないけど、いつかは乗り越えなきゃいけない事だとあたしは思うよ。それ乗り越えた先にきつと心が暖まる場所に辿り着けるんじゃないのかな」

結衣は真剣な目をしていた。

心の暖まる場所……。

「舞はいままで付合った彼氏に対して絶対自分の心の中に踏み入れられないよう、無意識に心に壁を作ってたよね。あたしはさ、そんな舞を見ていていつかその壁を壊してくれる人が現れて欲しいなっと思ってたんだ」

結衣……。

「そうすればきっと、生まれてきた意味が見つけれられるかもよ」

壁にもたれて体育座りをしていた舞はギュツと腕に力を込めた。

母親の『生まなきゃ良かった』という言葉は、生まれてきた事自体

が間違えではないのかと何度も自分に問いかけてきた。

トラウマを乗り越えれば、心の壁を壊す事ができたなら、本当に生まれてきた事に意味をみいだすことが出来るのだろうか。

どれだけ考えても結局答えは出てこない。

「来週、おじさんの誕生日会あるだよなあ」

舞は話題を変え、天井を見上げた。

「おじさんって一体いくつよ」

「うーん、いくつかな。40半ばだったと思うけど」

「40過ぎても家族で誕生日会ねえ。家族仲がいいのはいい事だけど、あんたにとっちゃ嫌みでしかないんじゃない」

結衣は少し呆れたように言った。

「嫌みだとは思わないけど、仲のいい家族の中にいるのはちょっと苦手かな」

「で、行くの？」

「うん。6年間お世話になったしね、断れないよ」

「律儀だねえ」

舞は“家族”というものが苦手だった。

なんでも1人でやってきた舞は“家族”というものとは無縁の生活だった為、宮沢家に引き取られた時には家族仲の良さにとても戸惑った。

両親に甘える子供達。

それを無条件の愛情で受け止めるおじさんとおばさん。

そんな光景が毎日のように繰り返される宮沢家に中にとくとても場違いな場所に来てしまったような気にさせる。

仲良く食卓を囲んでの食事など、居心地が悪くどう接していいのかわからなくなる。

大学進学を期に宮沢家を出たが、家族行事があるたびに呼び出されていた。

6年間もお世話になり、断る事も出来ずに毎回顔を出している。

その時結衣の携帯が鳴り、電話を終えたあと

「お店込んできたみたい。舞悪いけど手伝ってくれない？ 団体客が来たみたいだから」

「いいよ」

お店の中に入ると店内には10人程のお客が居た。

舞はカウンターの1番奥の席に目をやると見慣れた顔があり、舞を

見つけると微笑みながら

「めずらしいな」

「新見主任」

第13章：ライバル

良太は“スナック 秋桜”の常連客だ。

舞は良太に挨拶をした後、団体客のグラスを出したりお酒を作ったりと忙しくしていたが、一段落すると良太が話しかけてきた。

「ずいぶんと店では見なかったのに、今日はどうしたんだ？」

「今日は歓迎会の帰りにたまたま寄ったんです」

「じゃ、今日店に来た俺はラッキーだったな。デートは考えてくれた？」

「また、その話ですか」

舞は笑って誤摩化した。

「つれないなあ」

寂しそうに言う良太に結衣は

「良太さんはホント、舞がお気に入りだね」

「だけど、俺の思いはなかなか舞ちゃんには届かないからな」

良太は苦笑いした。

「それじゃ女関係ちゃんとしないと」

「俺の本命は舞ちゃんだけだよ」

「良太さんが言うത്と真実味ないよお。この間だってモデル風の女の人と腕組んで歩いてたの見だし」

「ああ、友達だよ。友達」

良太は何でもないように答える。

「友達が腕組んで歩くう？」

語尾を伸ばしながらからかうような結衣の言葉に良太は肩をすくめ話をそらした。

「ま、舞ちゃんの事は気長に口説くさ」

「あんまり気長にしていると、年下君に取られちゃうかもよ」

「年下君？」

「結衣！」

舞は慌てて結衣の名前を呼んだが、結衣はペロッと舌を出すと他の客の所へ行ってしまった。

良太は少し考えていたようだったが

「もしかして、例の男前君のこと？ 杉原と言ったっけ」

「そんなんじゃないですよ」

舞は否定したが良太は聞こえないかのように

「杉原に迫られたの？」

「だから、そんな事ありません」

「確か……、同じアパートだったよね」

「よくご存知ですね」

「好きな人の事は何でも知ってるよ。それに、情報収集は営業の基
本だから。 同じ屋根の下に男と女が一緒に居れば何かあつ
ても不思議はない……か」

「新見主任！」

良太は本気なのか冗談なのかわからないような口調でしゃべり続け
る。

舞は最後の方は反論する事すら止めてしまった。

お店が閉まる頃にはお客は良太だけになっていた。

終電も既になくなっていた良太はタクシーを呼ぶようママに言つと、
帰り支度をしていた舞に

「送るよ」

「えっ！ でも、反対方向ですからいいですよ。別のタクシー呼びますから」

舞が顔を横に振って断ると

「こんな時間に女性を1人で帰せないよ」

そう言うとき良太は舞の肩に腕を回し有無を言わず店の外に促した。舞は肩に回された腕を振りほどこうとしたがうまくいかず、一緒に外に出てしまう事になってしまった。

「良太さあん、送りオオカミにならないようにねえ」

少し酔っぱらった結衣の声が背後から聞こえてくる。

表に出ると、店の前で待機していたタクシーが2人の姿を見て車のドアを開けた。

「新見主任、本当に別にタクシー呼びますから」

「いいから乗って」

良太は半ば強引にタクシーに舞を乗せ、舞のアパートの住所を運転手に告げた。

「大丈夫だよ。送りオオカミにはならないから」

やさしく舞に微笑んだ良太だが

「もつとも、君が望むなら俺はいつだって一緒にいたいと思ってるけどね」

その言葉に一瞬後ずさりしそうになった舞だったが、それに気づいた良太はいたずらそうな顔をしクスツと笑った。

「冗談だよ。その気のない女性を襲うのは俺の主義に反しているから」

タクシーが舞のアパートの着くと良太は少し待つよう運転手に言いタクシー降りその後には舞が降りた。

「送っていただいてありがとうございました」

舞はお礼を言いその場を離れようとしたその時、良太は舞の肩越しに一瞬遠くに目線をやると、急に舞の腕を引っ張り気づいた時には良太の腕の中で抱きしめられていた。

良太は舞の頬にキスをすると耳元で

「おやすみ、舞ちゃん」

それだけを言うと、すばやくタクシーに乗込み去って行った。

いままで良太には“スナック 秋桜”で会つとよくアパートまで送ってくれたが、今回のように抱きしめられ頬にキスをされたのは初めてで、あまりに急な出来事で抱きしめられた時、

良太の腕を振りほどく事すら出来なかった。

舞は良太にキスされた頬に手を添えてその場を動けないでいると、

背後から声がする。

「あんまり人前でいちやつかないで欲しいな」

舞が声の方を振り向くと優がアパートの前に立っていた。

第14章：引越し

「そういえば、七海さんは？」

優は2次会のお店に着いて舞の姿が無い事に気がつき、1次会から隣にいる涼子に聞いた。

「いつも七海さんは2次会には参加しないの。幹事の仕事は1次会だけだし」

「そうなんだ」

「気になる？」

「イヤ、別に……」

優は誤摩化すように涼子から目線を外し、お酒を一口飲んだ。

「ねえ、杉原君って彼女いるの？」

「いないよ」

「じゃ、好きな人は？」

好きな人という言葉に優の脳裏に舞の顔が浮かんだがすぐさま否定した。

「いない」

「じゃ、私、立候補ね」

優は飲みかけたお酒を口元で止め、少し驚いたように目線だけを涼子にやる。

「やだ、そんな顔しないでよ。言ったでしょ、立候補だつて。

別にいますぐ付合ってほしいって言ってるんじゃないから。ということ、明日ヒマ？」

「引っ越しの片付けが終わってないからムリ」

「手伝ってあげる」

優は遠回しに断ったつもりだったが、涼子は気にせず答えた。

「悪いからいいよ」

「気にしないで。こう見えても片付けるの上手いんだよ」

「なんだあ、お前ら。もしかして、もう出来てるんじゃないのかあ」

同僚の吉野が2人に近寄ってきた。

かなり酔っているのか、足取りが怪しい。

「最初の店からずうと一緒にいるじゃん。杉原あ、涼子ちゃんを独り占めするなよあ」

吉野は優の肩を抱きながら優の隣に座る。

「吉野さん大丈夫ですか？」

涼子が心配そうに声をかける。

その後、優は吉野にさんざん飲まされタクシーで帰った。

喉が乾いた優はアパート近くのコンビニでタクシーを降り、ペットボトルを購入し歩いていると、アパートの前に1台のタクシーが横付けされた。

暗闇の中、街灯の灯りに照らされて1人の男が降りてきた。

それに続いて見覚えのあるシルエットがタクシーを降りる。

舞……？

先に降りた男と一瞬目が合ったが、男はすぐに目をそらし後から降りた舞を抱きしめ頬キスをした。

男は颯爽とタクシーに乗込み去っていったが、舞はその場に立ちつくしていた。

その一部始終を見ていた優は心臓を掴まれるような気分になる。

「あんまり人前でいちゃつかないで欲しいな」

優が声をかけると舞は驚いたように振り返った。

「2次会にいないと思ったら、あいつとデートしてたんだ」

「えっ！ 違うつ……、寄ったお店にたまたま新見主任がいただけで……」

「帰り際にキスするような仲だったとはね」

「そんなんじゃ……」

「ま、俺には関係のない事だけど」

それだけを言つと優は舞の横を通り過ぎ、自分の部屋へと帰った。

部屋に入ると優は大きくため息を吐きながら床に座った。

舞が良太に抱きしめられキスされている所を見た時、冷静ではいられなかった。

あいつ、俺が居るのをわかってわざとやりやがったな。

あんな事言つつもりじゃなかったのに。

俺、ガキみてえ……。

優は壁にもたれ天井を仰ぎながら、泣きそうな顔をしていた舞の顔を思い出す。

また、泣かしちゃったかな。

次の日、優は玄関のチャイムで目が覚めた。

時計に目をやると11時をすでにまわっている。

昨日、舞の事が気になってなかなか寝付けなかった優は怠そうに体を起こし、ドアの覗き窓を見ると外には涼子が立ってる。

優がドアを開けると、涼子にはっこり笑って

「やっぱりまだ寝てたんだ。昨日遅かったからそんな気がしてたけど、お昼買ってきたから一緒に食べよ」

涼子は買ってきたお弁当を胸のあたりまで持ち上げる。

「蘭田さん何でココに？」

「昨日約束したじゃん。引っ越しの片付け手伝って。忘れちゃったの？」

そういえば遠回しに断った覚えがあるが、途中で吉野が邪魔をして話が途中で終わった事を思い出す。

優はここまで来た涼子を追い返す訳にもいかず、とりあえず部屋の中に入れた。

「意外と片付いているね」

涼子は弁当を机の上に置き部屋を見渡している。

冷蔵庫からペットボトルを出し、お茶をコップに入れ涼子の前に置いた。

「食べよ。私お腹空いちゃった。ココのお弁当けっこういけるんだよ」

涼子はお弁当を袋から出すとそのうちの一つを優に渡した。

「そういえば、よくこのアパートわかったね」

「七海さんと同じアパートだって聞いたから、後は郵便受けに書いてある名前を見て部屋番号確認した」

プライバシー保護の為、本人が言わない限り会社側は社員の住所を教えてはくれない。

本当は涼子は総務の相田友香に頼み込んで住所を教えてもらったのだ。

お弁当を食べ終え一段落つくと涼子は台所を片付け始めた。

「杉原君って料理するの？」

段ボールから取り出した調理器具をみて涼子は驚いている。

中にはフライパンや中華鍋、大きさの違う鍋に蒸し器まである。

「料理は結構好きだから時間があれば自分で自炊してる」

「へえ、すごいね。今度何か作ってよ」

涼子の言葉に優は返事をせず、服をクローゼットにしまう。

「ほんととは今日のお昼は何か作ってあげようと思ったんだけど、男の一人暮らしじゃ調理器具なんてまともじゃないかと思って結局お弁当にしたの。何か買ってきて作れば良かったね」

「悪いからいいよ」

「気にしないで。料理作るのも好きだから」

明るく答える涼子に優は心の中で小さくため息を吐いた。

涼子は何事にも前向きに考える性格らしい。

舞にも何分の一かでもいいから、涼子の何を言っても堪えない性格があればと優は思った。

そして、こんな時にまでも舞の事を考えている自分にも驚いていた。

会社では舞の事を目で追っている自分がいる。

時折見せる陰のある表情を見つけるたびに優の不安が募る。

そのまま消えてなくなってしまうのではないかと。

抱きしめて、確かにそこに存在しているのだという事を確かめたいという衝動にかられるのだ。

優は苦笑した。

いつの間にこんなにも舞の事が心を占めるようになっていたのだろう。

一通り片付け終わると、時計は18時を回っていた。

「ありがとう。おかげで早く片付いた」

「どういたしまして」

「お礼に夕飯おごるよ」

「ホント！」

涼子はうれしそうに優に笑顔を向けた。

「でも俺、この辺りあんまりよく知らないんだけど、何処かい店知ってる？」

「この辺りだったらおいしい居酒屋があるから、そこでいい？」

「うん。任せる」

2人は部屋を出て優が鍵をかけていると

「あつ、七海さん」

涼子の声に優は階段の方に目をやると、ちょうど舞が階段から降りて来た所だった。

舞は驚いたように優と涼子の顔を交互に見ている。

「今ちょうど引越しの片付けが終わって、手伝ったお礼に杉原君がおごってくれるって言うからご飯食べにいくところなんです」

「そうなんだ」

「良かったら七海さんも一緒にどうですか？」

突然の誘いに戸惑っていた舞だが

「遠慮しとく。今から行くところあるから」

行く所があると言ったわりには舞の服装はＴシャツにジーパン、財布だけを手に持っていて、何か用事があるようには見えない。

「そうなんですか、残念だな。でも行く所があるんなら仕方ないですね。行こ、杉原君」

涼子は優の腕に自分の腕を絡ませ歩き出す。

舞の横を通り過ぎる時、優は舞を一瞥すると舞は少し下を向いていて、その表情を伺い知る事はできなかった。

第15章：それぞれの家庭

次の週、舞と優は毎日同じ時間に仕事を終え一緒に帰っていたが、2人ともアパートまでの道のりを特に何をしゃべる訳でもなく歩く。

舞は優と涼子の事を頭に浮かべていた。

個人情報保護がうるさい会社で個人の住所は簡単には教えてはくれない事を考えると、きっと優が自分でアパートの住所を教えたのだろう。

最近社員食堂でも総務の相田友香も含め3人で一緒に居る所をよくみかける。

気になりながらも舞は涼子の事を聞く事が出来ずにいた。

いや、聞いたところでどうにかなるわけでもない。

だけど、あまりに会話がないのもどうかと思い、まったく関係のない話を振った。

「男の人ってどんなものプレゼントされると喜ぶかな」

舞はおじさんへのプレゼントに悩んでいた。

女性へのプレゼントなら何かと思いつくのだが、40過ぎの男性へのプレゼントとなると何を送ったらいいのかわからず、毎年迷いながら結局ネクタイやネクタイピンなどになってしまう。

「プレゼント？ 誰に送るの？」

「親戚のおじさん」

優は怪訝そうな顔で舞を見てる。

「私、両親いないから。中学から高校卒業まで親戚の家でお世話になっていたので。で、叔父さんの誕生日に何をプレゼントしたらいいか毎年困ってるんだよね」

優は驚いた顔で舞を見ていたが何事も無かったように

「そのオヤジいくつだよ」

「たぶん、40半ば」

「40半ばで誕生日会ね。そんな年になってまで誕生日会ってやるか、普通」

優の言葉が結衣の言葉と重なり舞はおかしくなった。

「何、笑ってるんだよ」

「別に」

「変なヤツ」

優は少し考えていたようだが

「プレゼントって言われてもなあ。俺ん家、母子家庭だったから、

それぐらいの年齢の人だと何をプレゼントしたらいいのか……」

「ごめん……」

優の意外な言葉に舞を立ち止まり下向いて謝った。

すると、優は舞の頭に手を乗せ髪をクシャツとした。

「気にするなよ。母子家庭なんて今時めずらしくもないし、今は再婚してるから」

舞は顔を上げると優はやさしく微笑んでいたが

「それに……、舞の方が大変そうじゃん」

真剣な眼差しで真っすぐ舞を見ていた。

そんな真剣な眼差しで見られ舞はまた下を向いてしまった。

「ごめん……」

「そこ、謝る所じゃないから」

言葉を言い終わらないうちに舞は優に抱きしめられていた。

「言っただろ。俺で良かったらいつでも胸を貸すからって。父親がいないだけでもつらい思いする事があるのに、
両親がいないんじや舞の方がもっとつらかっただろ」

優の胸の中で舞は優の心臓の音を聞きながら、その規則正しい心音

に心地よさを感じた。

心臓の音ってこんなに心地いいものなんだ。

舞は今までつきあつた彼氏に両親がいない事を告げた事があつたが、みんな同情の言葉を一言二言言つて、その後は決して両親の事を話題に出さないよう気を使われるだけ。

こんなふうに抱きしめられる事なんてなかった。

それが当たり前だと思つていたし、それ以上の事を望んだ事はない。

優は抱きしめていた腕の力を緩めた。

舞が顔を上げると優は右手を舞の頬に触れた

「舞、泣きたいときはちゃんと泣けよ。がまんする必要なんてないんだから」

優のストレートな言葉が、とても心に響いてくる。

舞と優はしばらく見つめ合っていると、優の顔が近づいてきた。

お互いの唇が触れそうになった時、舞は顔を背けた。

キスをされるのが嫌だった訳ではない。

感情に流されてしまいそうになった事に怖さを感じたのだ。

このまま優に甘えてしまえば、二度と自分の足で立つ事ができなく

なるのではないかと。

人の暖かみや優しさを受け入れることで、自分が自分でなくなってしまうような気がしたから。

優は舞を自分の腕から離れた。

「ごめん」

舞は首を横に振る。

再び歩き始めたが、お互いずっと無言のままだった。

第16章：家族

土曜日、舞はデパートに来ていた。

あれから悩んだあげくお酒をプレゼントする事にしたのだが、お店に置いてあるお酒の種類が多く、あまりお酒に詳しくない舞は店員に事情を話し、日本酒で名酒をいわれるお酒を購入した。

プレゼントを抱え、宮沢家のインターホンを鳴らすと、インターホン越しに優しそうな叔母の声がした。

舞は自分の名前を告げると、少しして玄関が開いた。

そこには声と同じように優しそうな顔立ちをした叔母が立っている。薄らと化粧をした顔立ちは若々しく見え、とても40半ばには見えない。

「いらつしゃい、待っていたのよ。さあ、あがって」

叔母に促されるようにリビングに行くと、テーブルにはすでに姉の夏希と3つ年下の弟和馬、叔父がテーブルの席に着いていた。

「みんなそろったから始めましょう」

叔母の言葉に舞も席に座ると、叔母が部屋の電気を消した。

テーブルの真ん中に置かれたケーキには蝋燭が乗せられ和馬がライターで火を灯す。

薄暗い蠟燭の灯りの中、夏希と和馬そして叔母の『おとうさんおめでとう』の言葉に舞も『おめでとうございます』とみんなの言葉に重ねて言った。

叔父は大きく息を吸い込むと一気に蠟燭の炎を吹き消す。

真っ暗になった部屋に再び部屋の電気がつけられた。

みんなからプレゼントをもらい、一つ一つ開けてはうれしそうに叔父は『ありがとう』と言っていた。

最後に舞がプレゼントを渡すと、

「これは名酒、。。。じゃないか。いや、ありがとう。一度飲んでみたかったんだよ」

叔父はうれしそうにさっそくお酒の蓋を開け。

「母さんコップ」

「あらあら、飲み過ぎないくださいね」

叔母がやんわりと制しながらも、台所からコップを持ってきて叔父に渡す。

「さあ、みんなお腹空いたでしょ。食べましょう。舞ちゃんも遠慮せずたくさん食べてね」

テーブルの上には叔母が自慢の腕をふるった料理が並べられていた。

叔母は料理が上手で出されるものすべてがおいしい。

久しぶりに味わう叔母の手料理を口にして、舞はお袋の味とはきつところゆづのを言うのだろうなと思った。

料理を食べながらたわいもない話が続く。

最近付き合い始めた和馬の彼女はかわいらしく、お前にはもったいないと叔父に言われていた。

叔母は韓流ハマっているらしく、1週間前にお気に入り俳優の握手会に行ってきたと少女のように楽しそうに話す。

大学の教授の1人にカツラ疑惑があるとかで、それをおもしろおかしく話す夏希。

みんなの話に時々相槌を打つ叔父。

目の前に繰り広げられている家族団欒に笑顔を作っていたが、舞の心は家族という枠の外にあった。

家族とはいったいなんなのだろう。

同じ屋根の下で暮らし、一緒に食事をし語り笑い合う、共に過ごしていく時間。

舞にとっては決して与えられる事の無かった時間……。

そして、だんだん息苦しくなっていく。

早く帰りたい……。

「舞もそろそろいい年なんだし、結婚を考えるようないい人はいないのか？」

笑顔の裏でそんな事を考えていた舞に叔父が話しかけた。

「いい人がいるなら、ぜひ紹介してね」

叔母が言葉を続ける。

「残念ながら、そうゆう人は……」

舞は曖昧に笑って答えた。

アパートへの帰り道、舞は紙袋を手に提げていた。

帰り際、叔母が作った料理をタッパに入れて持たせてくれたのだ。

なぜ叔母一家は舞にやさしく接してくれるのだろう。

舞の母親が蒸発した時、親戚が集まって舞を誰が引き取るかを話し合っていた。

みんな面倒な事を背負い込みたくないと押し付け合いになり、最終的には施設に入るということで話がまとまりかけていた。

それでいいと舞も思った。

他人より遠い親戚の家に行っても施設とそう変わらないだろうと。

いつそ施設の方が誰にも迷惑をかけなくてもいいのかもしれない。

しかし、宮沢の叔母が引き取ってくれる事になったのだ。

叔母はまだ30になるかならないかぐらいの年で、幼い夏希と和馬をかかえ舞を迎え入れるのにはきつと経済的にも大変だったはず。

叔母はそんな事を態度や言動には一切出さず、優しく愛情を注いでくれた。

朝起きれば朝食があり、学校から帰ってくれば『おかえり』と笑顔で出迎えてくれ、家族団欒の夕食。

舞は戸惑った。

家族という輪の中でどう接したらいいのかわからない。

とにかく、叔父や叔母の機嫌を損ねないよう家の手伝いをし、夏希と和馬の面倒も進んでみた。

家族という輪の中に慣れようと必死にがんばった。

しかし、表面上は取り繕えても心は……。

アパートまであと5m程まで来た所で、舞は急に目眩がした。

手で目のあたりを押さえその場に立ち止まって治まるのを待っていたが、目眩はだんだん酷くなる一方で地面が揺れ始めた。

立っていらなくなり座り込んだが、今度は吐き気が襲ってくる。

アパートまであと少し、舞は体を動かそうとしたがゆうこうとをきいてくれない。

それどころか意識が朦朧としてきた。

朦朧とする意識の中、自分の名前を呼ぶ声がした。

第17章：目眩

舞は目が覚めると見慣れた天井が目に入ったが、なぜか違和感がある。

なぜだろうと周りを見渡すと同じアパートだが、周りに置いてある物が舞の見慣れた部屋の物とは違う事に気づいた。

体を起こすと吐き気は治まっていたがまだ目眩がする。

「気がついた？」

声のする方に目をやると優が立っていた。

「ビックリしたよ。コンビニに行こうと思って外でたら、舞が今にも倒れそうになってるんだもん。救急車呼ぼうとしたら横になれば大丈夫って言い張るし、とりあえず俺の部屋に運んだんだけど」

優は舞の顔を心配そうに覗き込むと

「まだ、顔色悪いな。ホントに病院行かなくてもいいの？」

舞は無意識のうちに救急車を呼ばれるのを拒んでいたらしい。

もし、呼ばれていたらきつと叔母に連絡がいき、心配をかけただろうと思った。

「ありがとう。でももう大丈夫だから」

ベッドから降りようとしたが、目眩がして振らつく。

優がとつさに体を支え、舞をベッドに座らせ優もその横に座った。

「なにが大丈夫だよ。まだそんな振らついてるくせに。舞、体どっか悪いの？」

「たいしたことじゃないから」

舞が答えると優はため息を吐いた。

「俺、そんなに頼りにならない？」

舞は優の顔を見ると、優は真剣な眼差しで舞を見ていた。

「言いたくないのなら無理に聞くつもりはないけど、でも今の舞には心の中にあるものを言葉に出す事が必要だと思う」

優は舞をそつと抱きしめた。

舞は瞳を閉じ、しばらくの間優の胸から聞こえてくるやさしい心音を聞いていた。

「たまにね。目眩がするときがあつて……」

優の胸の中で舞はゆっくり話し始める。

舞はいつの頃からよく目眩がするようになった。

貧血かと思って気にしていなかったが、長く続く目眩と時折襲う吐き気に不安を覚え病院に行った。

血液検査をしてもらったが、結果はどこも悪くないと言われた。

しかし、度重なる目眩を訴えると、自律神経からくるものだろうと診断される。

医者からは、とにかくストレスを溜めないよう注意を促された。

目眩や吐き気を押さえる薬を処方してもらい、最初のうちは飲んでいたがそのうち病院にも行かなくなった。

病院に行っても精神的なものならば、薬を飲んでも根本的に治る訳でもない。

酷くなるときは大抵部屋に一人で居るときだったし、外では軽い目眩はするものの、
少し安静にすると良くなっていたので気にしなくなっていた。

今回のように外で倒れたのは初めてだった。

「心が悲鳴をあげてるんだよ。それが体の不調になって訴えてるんだ。助けてくれって、もう限界だった」

話を聞き終えた優はしばらく黙っていたが、舞の髪をゆっくり撫でながら話した。

「俺が舞の為に何をしてあげられるかわからないけど、一人で抱え込むような事はするな。どんな形でもいいから吐き出せ」

舞が瞼を閉じると頬をつたって涙が流れる。

その涙と一緒に心の中の何かが一緒に溶け出してくるようだった。

優は舞を自分から離し、右手の親指でそっと涙を拭い舞の頬を撫でる。

「泣くときはちゃんと声を出して泣く事。そうすることで少しは気持ち楽になるから」

しばらく見つめ合っていた2人だが、どちらからともなく唇がそっと重なり合い離れると、もう一度唇を重ねる。

今度は深くとても優しいキスだった。

唇が離れ、優は自分の額を舞の額にくつつける

「もう休んだ方がいい。でないと俺、止められなくなりそう」

はにかんだ笑顔で言った。

「さすがに病人は襲えないからな」

舞は微笑んだ。

不思議と先程より目眩が治まっているようだった。

「目眩も治まってきたみたいだし、やっぱり帰る。このままベッド占領しても悪いし」

時計はすでに夜中の1時を回っていた。

優は舞を抱きしめ

「ダメ！ 帰さない。このまま帰したら心配で俺の方が眠れなくなる」

「でも……」

優はそつと舞をベッドに寝かせ額にキスをした。

「今日はこのまま俺の部屋で寝てて。俺の事だったら心配しなくてもいいから」

そして優は舞の手を握った。

「舞が寝るまでそばにいるから」

手を握られて眠る事がとてもくすぐったかったが、しばらくすると舞は眠りに落ちていった。

第18章：過去3

朝、部屋に差し込む明るい日差しで目が覚めた。

「おはよう。よく眠れたみたいだね」

体を起こすと優はすでに起きていたようで、舞のそばに寄り顔を覗き込んだ。

「顔色もいいみたいだし」

ホッとしたような優の声。

舞は台所からいい匂いがしてきているのに気がついた。

「いい匂い」

「朝ご飯作ったんだ。食べる？　と言ってももうブランチになるけど」

時計を見ると10時半を回っていた。

「杉原君が作ったの？」

「うちは母子家庭だったからね。かあさんが仕事でいない時は俺がご飯を作ってたんだ」

優は台所に行き朝食の用意を始めた。

舞もベッドから降り手伝おうとしたが優に

「病人は座ってて」

と部屋に戻されてしまった。

「舞ってよくコンビニ弁当買ってるだろ。少しは自炊した方がいいよ」

朝食を食べながら優は舞の痛い所をついた。

「料理はあまり得意じゃないから。それに、仕事で遅くなるとどうしても面倒くさくて、つい」

「そんなこと言っていると体壊すぞ。今夜、夕飯作ってやるから食べにこいよ」

優は優しい笑顔を舞に向けていた。

日の光に照らされた優の顔がまぶしく見え、舞は目をそらした。

「でも、おばさんからもらったおかずもあるし」

「ああ、あれなら冷凍しておいたから、明日仕事から帰ってきてから食べればいいよ」

と半ば強引に夕食に来る事を約束させられ、朝食の後舞は自分の部屋へと戻った。

シャワーを浴び終わると、舞は髪をドライヤーで乾かしながら優の

事を考えていた。

優の部屋を出る時、同じアパートなのだからここでいいと玄関先で言ったが、舞の部屋まで送ると言ってきかなかった。

部屋の鍵を開け舞は優にお礼を言うと、優は舞を抱き寄せ軽くキスをし

「夕飯出来たらメール入れるから」

と言って自分の部屋へと帰っていった。

知らない人から見たらきつと仲のいい恋人同士に見えただろう。

優のその態度に舞は思う。

これは付き合っていると言うのだろうか……。

でも、告白された訳でもないし……。

別に告白にこだわる必要もないのだが、幸せという事に慣れていない舞には、今の状況に何か理由をつけたかったのかもしれない。

優に抱きしめられ心臓の音を聞いた時、心地よさを感じた。

優の手は大きく、舞の手を暖かく包み込んでくれる。

優の言葉は、直接舞の心に響いてくる。

しかし、同じように襲ってくる不安や怖さも拭う事が出来ない。

幸せを感じれば感じるほどきつとそれが壊れた時、幸せを知らなかった時の比でないほど打ちのめされるのではないか。

そうなった時、自分は1人で立ち上がる事ができるのだろうか。

舞の思考は祖母が亡くなり、母親の美樹の元に引き取られた時の事を思い出す。

祖母の葬儀中、母親の美樹はまるで舞が存在していないかのような態度で無視し続けた。

親戚に諭され仕方なく舞を引き取る事にした美樹だったが、葬儀が終わり親戚一同が帰ると

「私はお前の面倒なんか本当はみたくないんだ。だから、自分の事は自分でしな」

冷たい目で舞を見ながらそう言い放った。

その言葉通り美樹は面倒を見るといふよりは、放ったらかし状態でパンやコンビニ弁当を与えているだけだった。

幸い舞は祖母の手伝いをよくしていた。

祖母は舞が家の手伝をするたびに、舞の頭を撫でながら

「手伝ってくれてありがとう。舞はえらいね」

と、笑顔で言ってもらえるのがうれしくて、出来る事は何でも手

伝った。

その為、母と暮らし始めても食事以外はどうか自分でやる事ができた。

しかし、それでも美樹は舞の存在自体が邪魔だった。

部屋に男を連れ込んでも舞を見ると嫌な顔をされるからだ。

舞と暮らし始めてた頃、お気に入り男性を家に連れ込んだが、舞を見て逃げるように去っていったあの日、舞は初めて母親に暴力を振るわれた。

『お前が居るせいで男が逃げていったじゃないか！ この疫病神！』
そう言つて美樹は舞に向かって近くに置いてあつた置物を投げつけた。

置物は舞の左上のおでこに当たり皮膚が切れ血が流れると、舞は思わず声を出して泣いた。

『うるさい！ それぐらいのことでいちいちビービー泣くんじゃないよー！』

美樹は舞に近寄り、壁に体を押し付けるようにして舞の口を片手で押さえつける。

舞は息苦しくなり逃げるように体を動かすと、美樹は手を離しそのまま舞の頬を叩いた。

バシッ！と部屋に頬を叩く音が響き、舞はその勢いで畳に倒れ込む。

その時の母親の舞を見る目にはひと欠片の愛情も同情もなかった。

その日から舞は声を出して泣く事をしなくなった。

舞は思った。

なぜ、祖母は自分を置いて逝ってしまったのかと。

祖母との生活は決して裕福な生活ではなかったが、それでも舞は祖母の愛情を確かに感じていた。

祖母が愛情を注いでくれた分、母親との生活は辛いものだった。

愛情を知っていたが為、無くしたときの虚無感は今でも鮮明に覚えている。

もう二度と手に入らないものならば、最初から愛情というものを知らなかった方が幸せなのかもしれないと、大人になるにつれ思うようになっていく。

第19章：夕食

舞は少し目眩がしベッドで横になっているうちに寝てしまったようで、メールの着信音で目が覚めた。

メールを確認すると

〓 〓 〓 〓 〓 〓

夕飯準備完了！

料理が冷めないうちに降りておいで

優

〓 〓 〓 〓 〓 〓

本当に作ってくれたんだ。

舞は髪を梳かし薄く化粧をして優の部屋の前でインターホンを押した。

しばらくして優が扉を開け

「どつぞ」

と中へ入ると机の上にはすでに料理が並んでいた。

「すごい！」

煮物を中心に焼き魚やお味噌汁、茶碗蒸しまである。

男の人でこんなふうに和食が作れるなんて……。

思っていた以上に立派な夕食に舞は感動していると

「ほら、早く座って」

優に促されテーブルの前に座り一緒に夕食を食べた。

「おいしい！　これ本当に全部杉原君が作ったの？」

「当然！」

「なんか……、お嫁さんいらすだね」

「なに、そのお嫁さんいらすって」

舞の言葉に面白そうに優は聞いた。

「だって、こんなに完璧に料理が作れちゃうんじゃ、奥さんになった人は立場無いなあと思って」

優はクスツと笑って

「どんなに上手に料理が作れても、やっぱり奥さんになった人の料理は食いたいよ。　まあ、俺の場合一緒に作るのも楽しいかなと思っけどね」

夕食が終わり、せめて片付けはやろうと舞が台所に行くと、

「いいよ。俺やっとくから」

「でも、いろいろやってもらって悪いから」

と結局2人で片付ける事になった。

「こうゆうのもなかなかいいもんだな」

優は洗った食器を拭きながら笑顔で言った。

「誰かと一緒に食べたり片付けたりするのって。俺、家で1人で居る事多かったから」

食器を洗い終わって手をタオルで拭きながら

「そうだね」

舞にとっては1人で居る事の方が居心地が良かった為、少しそっけない感じの答え方だった。

優は食器を棚に片付けるとお湯を沸かし、緑茶を入れてくれた。

男の人に緑茶をいれてもらうのはなんだか変な気がしたが、舞が体調を崩しているからコーヒーより緑茶の方がいいだろうとのことだった。

片付けが終わったからといってすぐ帰るのも気がひけ、舞は優とべ

ツドを背もたれにしながら何を話す訳でもなく、並んでテレビを見ていた。

「舞」

急に名前を呼ばれ舞は体をビクツとさせ、優の方を見ると

「そんな警戒するなよ。まだ体調良くなってるんだろ。襲わないって、ってか俺何回この台詞言ってるんだろ……」

優は自分の言葉にガックリ肩を落としながらうなだれた。

「ご、ごめん」

「別にいいけどさあ」

口を尖らせて拗ねている様子がいかに年下らしくて、とてもかわいく見え少し可笑しかった。

「ホント、ごめん。そんなつもりじゃなかったんだけど……」

「じゃ、ひとつだけお願い聞いてくれる？」

うなだれたまま上目遣い見る優にドキッとした。

「お願いごと？」

「そっ」

「出来ることだったら……」

舞が答えると、優はさっきとは違って変わって笑顔を作り

「じゃ、優って名前で呼んで」

「えっ！」

「だってさ、舞って初めて会ったときから一度も下の名前で呼んでくれた事ないだろ」

確かにそれはそうだけど……、でも……。

舞は困って下を向いていると、優が舞の顔を覗き込んだ。

「ダメ？」

甘えたように聞いてくる優。

「ダメじゃないけど……。急には……。ちょっと……。恥ずかしい……。かな」

いいながら舞はだんだん声が小さくなってしまい、顔が赤なっているのが自分でもわかった。

そんな様子を見ていた優は舞を抱きしめ

「赤くなって、かわいい」

優の言葉に舞はますます恥ずかしくなってしまった。

抱きしめられているから、顔が見えないのが幸いだ。

「こうしてたら顔見なくていいから、恥ずかしくないだろ。呼んで欲しいな」

いつもストレートな言葉を舞に投げかけてくる優。

そんな優に舞はいつも翻弄されているような気がする。

「ねえ、舞」

少しせかすような、でもそれを楽しんでいるような優の声。

仕方なく舞は小さな声で呼んだ。

「ゆう……」

「ん、聞こえない」

もう一度、先程より声に力を込めて呼ぶ。

「優」

舞が名前を呼ぶと優は舞を腕から離し

「舞」

そう呼ぶと優は舞に顔を近づけやさしくキスをした。

そして、そのまま優は舞の唇に自分の舌を割り込ませ舌を絡ませる。

それは、自分の事を舞に刻み付けるように何度も深いキスをした。

第20章：成長させてくれる恋

「で、しちゃったんだ。キス」

舞はコックと頷いた。

舞は仕事の帰りに結衣と居酒屋に飲みに来ていたが、開口一番に優とのその後を聞かれていた。

“スナック 秋桜”の定休日は日曜日だが、結衣は水曜日を自分だけの定休日と決めていて、お店には出ない。

結果的に、結衣と飲みに出かけるのは水曜か日曜である。

舞は優とキスをした後、しばらくして部屋に戻った。

その時も優は同じアパートにもかかわらず、部屋まで送ってくれた。

「なんか、大切にされてるって感じだね」

「そう……かな……」

舞は少しつつむき加減になりながらビールに口をつける。

「だって、普通2人つきりで部屋に居てキスまでしたら最後までやつちゃうでしょ。それに、同じアパートで部屋まで送らないよ」

結衣はビールを一口飲むと

「付き合つの？ てっか、付き合ってるよね。その状況は」

舞はグツと言葉に詰まった。

確かに今の状況はそう言われても否定できないような気がする。

しかし、舞はまだ素直にそう思えないでいた。

優とキスした事で会社で顔を合わせづらいと思っていたが、月曜日に会社で会っても優はいたって普通で、一緒に帰る時もたわいもない話をするだけだった。

そんな優をみていると、キスした事がまるで夢だったかのような気分になる。

「今回は逃げられないよ」

黙ったまま視線を下に向けていた舞は結衣の言葉にドキツとして顔を上げた。

「いままであなたは誰かと付合っても結局自分から避けるような態度だったでしょ。自分の都合が悪くなるとすぐに相手の事避けて連絡をとらなくなる」

結衣はダバコに火をつけ一口吸った

「でも、今回は避けたくても同じ職場で住んでる場所も同じ。ここまで状況がそろってると、正面向いてちゃんと相手と向き合う事しないよね」

結衣とは長い付き合いだけに、舞の欠点をよくわかっているのに指摘してくる。

その指摘が針を刺したように舞の心がチクチク痛む。

今まで自分の心に踏み込まれそうになると、舞は無意識のうちに相手を避けるように連絡をとらなくなっていた。

しかし、優の場合は……。

職場も住む場所も同じでは、いままでのように逃げる訳にはいかないだろう。

いや、そもそも優は初めて会った時から舞の心に入り込んでいて、すてに逃げられないのかもしれない。

「それでも、意外だったな。舞の心を癒してくるのは良太さんだと思っていたのに」

意外な名前を聞いて、舞はキョトンとした様子で結衣を見た。

「なんで、新見主任の名前が出てくるの？」

舞の態度に結衣は呆れたように

「あんだ、ホントに気づいてないの？ 良太さん、絶対舞に本気だよ」

「やだ、そんなわけないじゃん」

舞は笑って否定した。

結衣はジッと舞を見た後に肩を窄め

「信じる信じないは舞の勝手だけど。いつも舞を見ている時の良太さん、すごくやさしい目してるよ。　　なんか、見守ってるって感じがして。密かに良太さんを応援してたんだけどね」

舞はまだ結衣の言葉を信じられないような顔をしてる。

「結衣、本気で言ってるの？」

「もちろん。こんな事冗談では言わないよ。良太さんは確かに遊び人だけど、舞を見る目は他の人とは絶対違う」

本当にそうなんだろうか……。

断言して言う結衣に、頭の中で良太を思い出してみたが、いまいち実感がわかない。

「まあ、あたしとしては舞の事をちゃんと正面きって向き合ってくれる人なら、良太さんだろうが年下君だろうがどちらでもいいけど」

「結衣……」

結衣はいつも舞の事を本気で心配してくれる。

唯一心の許せる親友に舞は本当にありがたいと思っていた。

タバコの火を消し、結衣は舞に笑顔を向けた。

「舞、自分を成長させてくれる恋愛をしなよ」

第21章：疑惑1

金曜日のお昼休み。

舞は仕事がずれ込み遅めの昼食を終え、エレベーターホールへと向かった。

しかし、エレベーターに乗込む人が多く何回か待たなくてはならないようで、仕方なく舞は階段で行くことにした。

階段を上っていると3階の踊場付近から女性の声が聞こえてくる。

「いまさらそんな事言わないで」

あまり使用されない階段は、たまに社内恋愛模様が繰り広げられる場合がある。

舞はまずい所に出くわしたなと思った。

仕方なく2階からエレベーターホールに向かうため、階段を下りかけた時

「ごめん。やっぱり、こんな事よくないよ」

踊り場から聞こえた慣れた声がした。

舞はその声にドキツとし、見てはいけないと警告する胸の高鳴りが聞こえないかのように、足が踊り場の方へと向かった。

踊り場からは見えない所まで来ると足を止め、顔だけを覗き込むように踊り場を見た。

そこに見えたものは、壁に背をもたれさせている優と、舞からは背中しか見えないが優と対峙している涼子の姿が目に入った。

「お願い、あなたしかいないの」

涼子の声は切羽詰まった感じだ。

優は困ったように頭の後ろを壁にもたれさせ天井を仰いでいる。

「お願い……」

涼子は優の胸に寄りかかった。

舞は逃げるようにその場を去ると、女子トイレに駆け込んだ。

個室のドアを閉めると、ドアに背中をつけ両腕で体を抱いた。

心臓の鼓動が止まらない。

あの2人は付合っているのだろうか。

いや、あの様子を見れば一目瞭然だ。

今でも一緒に昼食を食べている姿をみかけるし、引っ越しの手伝いだといって優の部屋にも来ていた。

ああ、もっと早く気付けば良かった。

私との事はきつと見るに見かねての行動だったのだろう。

じゃ、あのキスは……？

舞は首を振った。

きつとその場の雰囲気でおもわずしてしまったのかもしれない。

「ふふっ……」

優と涼子と一緒にいる所を目撃して動揺している自分に、舞は笑いがこみ上げてきた。

一体何を期待していたのだろう。

優から差し出される暖かい温もり？

愛情？

闇に捕われている自分の心を救ってくれるかのしれないと期待してるの？

舞は自分が甘い期待を優にしていた事に気がつく。

お昼休み終了5分前のベルが聞こえ、舞は仕方なくトイレを出て自分の席に戻った。

その足取りは重かったが、冷静さを取り戻すように自分に言い聞かせた。

優と涼子は何事も無かったように自分の席に着いていた。

舞もいつものように仕事をしていた……と、思っていたが

「七海さん！」

優に呼ばれハッと我にかえる。

どうやらボツとしてキーボードの上にある手が止まっていたようだ。

「どうしたんですか？」

心配そうに声をかけてる優に舞は、一瞥しすぐディスプレイに目を戻した。

「なんでもない。ちょっと考え事してただけ」

その態度は明らかにおかしかったのだろう。

隣の席で怪訝そうな雰囲気伝わってくる。

「今日は、飲み会があるんで定時で失礼させてもらいますね」

「えっ……」

驚いたように優を見ると

「昨日、今日は定時で帰る事はお伝えしていたと思いますが……」

優の言葉に舞は、そういえば……と言われた事を思い出す。

時計を見るとすでに定時を回っていた。

「そう……だったね。ごめん、忘れてた」

「ホントに大丈夫ですか？」

優の心配そうな声がする。

「大丈夫だよ。いつてらっしゃい」

無理して作った笑顔を優に向けながら言った。

「杉原君、行こ。遅れちゃう」

涼子に声に促され、優は仕方なく席を後にした。

「お先に失礼します」

2人の声が重なりながら、部屋を出て行く。

舞は複雑な思いだった。

いつものように仕事が終われば、一緒に帰らなければならぬだろう。

どんな顔をして一緒に帰ればいいのかと置いていたから内心ホッとしたが、涼子と一緒に出て行く優を見て胸がチクリと痛んだ。

無かった事にすればいい。

今までそうしてきたように、優の事は心の奥底に押し込めてしまえばいい。

舞は自分にそう言い聞かした。

次の日、舞は携帯の着信音で目が覚めた。

布団の中でもぞもぞ動きながら手だけで枕元に置いてある携帯を探す。

携帯の着信表示を寝ぼけ眼で確認すると、――杉原優――とある。

眠気が一気に吹っ飛び、ガバツと起き上がった。

どうしよう……。

舞は出るか出ないかで迷ったが無視するのもどうかと思い、仕方なく通話ボタンをおそるおそる押す。

「……もしも……」

電話の向こうにまで聞こえるのではないかと思つほど、心臓が高鳴っている。

「おはよう」

さわやかな声が電話の向こうから聞こえてくる。

「…………おはよう」

「今日と明日なんか予定ある？」

予定を聞かれ舞は焦った。

昨日の今日では正直会いたくない。

「えっ、予定？」

「そう、予定。もしなければまたご飯作るから来るかと思って」

「あっ…………ごめん。今日も明日も予定があつて…………」

「そっか……。じゃ、仕方ないな」

残念そうな声が電話の向こうから聞こえてくる。

「うん、ごめんね」

舞は早く電話を切りたくて話を終わらせようとしたが、すかさず優の声が聞こえた。

「舞さ…………、なんかあつたの？」

優の指摘に舞は心臓がドキツとする。

「何で？」

出来るだけ平静を装いながら聞く。

「昨日、なんか様子が変だったからさ」

「……別に、何にもないよ」

「ふーん。ならいいけど……」

舞の言葉を信用していない様子で優は答える。

しばらくの沈黙ののち

「また、電話する」

「えっ、ああ、うん」

ぎこちない感じで電話は切れた。

携帯を持ったまま舞は一気に緊張感が取れたようにハァーとため息を吐いた。

今日は、結衣に会った時お店を手伝う約束をしていた。

だから、今日予定があるというのは嘘じゃない。

しかし、明日は……。

舞はベッドにゴロンと横になった。

特に予定があるわけではない。

優の誘いを断る為にとつさに予定があると言ってしまったのだ。

同じアパートでは一日部屋に居ればきつとバレる。

どうしようか……。

それにしても、一体優は何を考えているのだろっ。

涼子と付合っているのならなぜ舞に電話をしてくるのか……。

舞はギュッと目を閉じた。

抱きしめられた時の優の心地よい鼓動が蘇ってきた。

包み込むように抱きしめる腕。

手を握った時の安堵感。

思い出すすべてが暖かく思えた。

第22章：明日の予定

“スナック 秋桜”の扉を開けると、時間が早い為かまだお客は来ていなかった。

中に入るとカウンターに結衣が座って、携帯のワンセグでテレビを観ていた。

舞が入ってきたのに気がつくと、笑顔を向け

「おはよう」

夜の業界では何時だろうと“おはよう”と挨拶をする。

「おはよう」

舞も同じように挨拶を返した。

「今日は悪いね」

「いいよ。別に特別予定なんてないから」

今日は結衣のお母さんが友達と1泊旅行に行ってしまったので、お店の応援を頼まれたのだ。

舞は結衣の横に座りながら

「結衣って明日なんか予定ある？」

「ん、明日は京介とデート」

ワンセグの方を観ながら結衣は答える。

「あつ、そうなんだ」

デートなら明日付合っで欲しいとは言えないなあ。

「明日、なんかあるの？」

「なんとなく……聞いてみただけ。京介さん元気？」

舞は話をそらした。

「相変わらずだよ、忙しくてあんまり会えない。ホントあいつって仕事人間だから」

愚痴っぽく言っているわりには、京介の話をしている結衣の顔はほころんでいる。

その様子を見てみると、結衣がかわいく見えた。

ホントに好きなんだろうな、京介さんのこと。

お客が来るまでの間、2人でたわいも無い話をしていると、店の扉が開き5人のお客さんが入ってきた。

それをかわきりに別のお客も来店し、店はあっという間に賑やかになった。

賑やかな店内が一段落すると、また店の扉が開く。

「いらっしゃいませ」

開いた扉に向かって声をかけると、店内に入ってきたのは良太だった。

良太の姿を見て舞は少しドキツとした。

この前送ってもらった時に、頬にキスされて以来会社でも顔を会わしていなかったのだ。

良太はカウンター席に座ると、舞はおしほりを渡す。

「最近よく入ってるね」

その話し方はまるでこの前の事が何もなかったかのような話し方だったので、舞は内心ホツとしながら

「今日はママの代理。旅行に行っちゃって結衣が一人だって言うから」

時間が1時を回る頃にはお店の方が一段落し、店内には良太と2名の常連客だけになっていた。

「舞、今日はもういいよ。多分もうお客さん来ないと思うから」

結衣の言葉を聞いた良太は

「舞ちゃんもう終わり？　じゃ、ラーメンでも食べにいかない？」

俺腹減っちゃった」

33歳の良太が言うには少し子供っぽい感じの言い方だったので、舞は少し可笑しかった。

「いいですよ」

「じゃ、結衣ちゃん、舞ちゃん借りるね」

舞はお会計を済ませた良太と一緒に店を出る。

お店から5分程歩いた所にいつも良太が行くラーメン屋さんがある。

「久しぶりだな。こうやって舞ちゃんとラーメン食へに来るの」

良太は割り箸を割りながら言った。

舞と良太が初めて会ったのは会社ではなく、“スナック 秋桜”だった。

まだ大学生だった舞はよくバイトで店を手伝っていた頃に良太が友人に連れられてやってきたのだ。

その頃はお店が終ると結衣も含め、良太達と一緒にラーメンなどを食へに来ていた。

しかし、舞が就職するとお店に出る事が無くなった為、こうやって一緒に食へに来るのは本当に久しぶりだった。

「本当ですね」

舞はラーメンに口を食べながら答える。

「舞ちゃん、最近なんかあったの？」

良太の急な質問に一瞬ラーメンが喉に詰まりそうになり、慌てて水を飲んだ。

「どうしたんですか？ 急に……」

「なんかいつもと様子が違うなと思ってね」

「そ、そうですか」

良太はジッと舞の顔を見つめ

「原因は……、あの年下君？」

「えっ……」

良太に凶星され舞は固まってしまった。

すると良太はククツと笑い

「舞ちゃんはホントわかりやすいな。かまかけたんだけど凶星だったんだ」

かま、かけられたの……。

結衣は固まっていた体に力を抜くと同時に、ガツクリと肩を落とす

軽くため息を吐いた。

「ごめん、ごめん。そんなに簡単に引つかかるとは思ってなかった」
謝っているわりには、申し訳そうに聞こえない。

「だってさ、店で手が空くと何か考え事してただろ。少し辛そうにも見えたから」

確かに舞は、ふとした瞬間に踊り場での優と涼子の事が頭に浮かんでいた。

考えないようにしていたのだが、舞の思考はそれを許してはくれないようだった。

「しかし、妬けるな」

良太の言葉に舞は顔を上げる。

「舞ちゃんにそんな顔をさせるアイツに」

舞を見つめる良太の眼差しは一瞬辛く悲しそうに見えたが、次の瞬間には先程の眼差しが嘘のように明るい笑顔に変わる。

「というわけで、明日デートしよ」

というわけだというのは、どうゆうわけなんだろう。

急な変わりように舞が戸惑っていると

「舞ちゃんには気分転換が必要だと思うよ」

「気分転換……」

「そつ、明日俺がいい所に連れってやるよ」

明日は何も予定がない。

それどころか、優に誘われてそのまま部屋にいるわけにもいかないから、どうやって時間を潰そうかと考えていた舞にはありがた誘いだっただ。

「いいんですか？」

「もちろん」

舞の返事に良太は舞の頭を優しく撫でた。

「やっと、OKの返事もらえたな」

第23章：デート

日曜日、良太との約束は16時だった。

アパートまで迎えにくると言っていた良太から、到着を知らせるワ
ン切りコールが舞の携帯に鳴った。

部屋を出ると、良太は車のハザードを付けたまま歩道でタバコを吸
っていた。

「どうぞ、お嬢さん」

舞が良太の近くに来ると、良太は助手席のドアを開けにこやかに言
った。

その仕草はとても慣れている様子で、女性との噂が絶えないのもう
なづける気がした。

助手席のドアを閉めると、良太はタバコを一口吸って携帯灰皿でタ
バコを消してから運転席に乗込んだ。

「さあ、行こうか」

良太は車を発進させ、高速道路へと向う。

「何処に行くんですか？」

どこへ行くのかを知らされていなかった舞が良太に聞くと

「とりあえずドライブかな。ようやく舞ちゃんとデート出来るんだから、ふたりっきりの時間を大切にしたいからね」

齒の浮くような台詞を口に出されて舞は少し恥ずかしくなったが、そんな舞の様子を気にする事も無く楽しそうにしている。

「それと、今日は新見主任ってのはなしだよ。前みたいに下の名前で呼んで」

舞は会社に入るまで良太の事を下の名前で呼んでいたが、さすがに会社で『良太さん』と呼ぶわけにはいかず名字で呼ぶようになり、今に至っている。

「でも……」

「デートなんだから堅苦しい呼び方はなし。ね、舞ちゃん」

顔は笑っていたが、有無を言わせない目で見られ舞は仕方なく頷いた。

2時間程車を走らせ、夕食を済ませて時計を見ると19時を回っている。

夏が終わり、秋が訪れ始めているこの時期、太陽はすっかり顔を隠し街灯に明りが灯っていた。

「そろそろいいかな」

良太は辺りが暗くなっているのを確かめるようにして言い、車に乗込んだ。

「今度は何処に行くんですか？」

「ん？ いい所だよ」

しばらくすると、良太は何処かの駐車場に車を止めた。

「着いた。ここから少し歩くから」

良太に促され車を降り、肩を並べて歩く。

近くには川が流れているのか、川のせせらぎが聞こえる。

そして、川に架かっている橋の近くまで来ると良太は舞の方を向き

「舞ちゃん目、瞑って」

「えっ、目を瞑るんですか？」

良太が何をしようとしているのかわからず、どうしようかと迷っている

「ほら、早く！」

その言葉に仕方なく舞は目を瞑る。

「いって言うまで目を開けちゃダメだよ」

良太は舞の手を握ってゆっくり歩き出す。

目を瞑っているから周りが見えない舞は、良太に引かれるままおそるおそる歩く。

ほんの少し歩くと、川のせせらぎが先程より近くに聞こえてきた。

立ち止まると良太は舞の後ろから両肩に手を置いて

「開けていいよ」

良太の言葉に舞は目を開けると、息を飲んだ。

そこは、川縁に数えきれない程の灯籠が地面に置いてあり、真っ暗な闇の中をやさしく包み込んでいた。

距離にして1キロ以上あるだろうか。

舞の立っている橋の上から見下ろすその光景は、電気の明りに慣れている舞にはとても幻想的に見えた。

「きれい……」

「この辺りの地域は観光に力を入れていて、これもその一環なんだ。毎年この時期の土日だけ、川縁にたくさんの灯籠を置いて秋の夜長を楽しませてくれるんだ」

良太は舞の顔を覗き込み

「気に入った？」

「うん。こんなにたくさんの灯籠を見たのは初めて」

「じゃ、下に降りてみる？」

「下に降りれるの？」

良太は舞の手を繋ぎ歩き出した。

川縁に降りると、橋の上から見るのとはまた違って異世界へ迷い込んだような気分だった。

たくさんの灯籠で作られた回廊歩いていると、灯籠の優しい光に包み込まれ不思議と気持ちいが和らいでいく。

「少し座ろうか」

良太の言葉に舞は辺りを見渡すと、所々にカップルが腰を下ろして愛を囁きあっている。

舞も良太に促され近くの土手に座った。

秋を感じさせる風がやさしく舞の頬を撫でる。

川のせせらぎと共に鈴虫の鳴き声が聞こえ、毎日の日常が嘘のように穏やかな時間が流れていく。

しばらく間、灯籠が作り出す幻想的な風景を眺めていると、良太は繋いでいた舞の手の指と指の間に自分の指を絡めてきた。

灯籠が作り出す幻想的な空間に入り込んでいて、良太と手を繋いでいる事すら忘れていた舞は、急に手を絡めてきた事に驚いて良太の

方を振り向いたが、良太は真つすぐ前を見つめているだけだった。

「良太さん……？」

舞の呼びかけに良太は振り向かず前を向いたまま

「俺なら舞の事、守ってやれる」

舞は心臓が飛び出るかと思うほどドキツとした。

良太に舞と呼び捨てにされたのが初めてだった事と、前を向いたまま
まだつたがいつもの良太らしくない真剣な表情をした横顔。

そして脳裏に浮かんだ結衣の言葉。

『良太さん、絶対舞に本気だよ』

息を飲んだまま舞は良太の顔を見つめていた。

良太は舞の方を振り向くと、まっすぐに舞の瞳を捕らえて離さない。

「ずっと、舞だけを見ていた。だけど見守るだけではもう満足できない」

良太は絡めた手を上げ舞の手にそつと口づける。

それは、唇を重ねることよりも悩ましい感覚を舞に与え、静かな川
縁では大音響で聞こえてしまうのではないかと思うほど、心臓が激
しく高鳴りだしていく。

舞は必死でその感覚を振りほどくと、回らなくなり始めていた頭の中で言葉を探した。

「どっ、どうして……、私なんか……」

良太はふっと笑うと

「どうしてなんだろうな。ときどき見え隠れする舞の陰が俺を惹きつけるのかも」

「陰……、ですか……？」

「気づいてないだろうけど、舞は顔が笑っていても目が笑ってない。心の奥から笑っているのを俺は見た事が無い。ふと見せる表情はどこか悲しげで、見ていてこっちが切なくなる」

「そんなこと……」

「きっと、舞の歩んで来た人生がそうさせているんだろう。俺なら舞の背負ってきた人生を全て受け止める事が出来る」

舞は目を見開いた。

私の人生……。

この人は何を知っているのだろうか……。

まるで、自分の過去を全て知っているかのように聞こえる。

「私の……、何を知っているっていうんですか？」

「人はね、今まで生きてきた人生の年輪が顔や雰囲気、性格に本人も気がつかないうちに刻まれていくものなんだよ。それは、隠そうとしても決して隠しきれるものじゃない。いままで舞に惹かれた奴らもきつと舞のそうつ陰の部分に無意識のうちに惹かれたんだろう。守ってあげたいってね」

良太はやさしく舞を包み込むような瞳をしている。

舞はようやく良太から目をそらすように下を向いた。

「守ってあげたいなんて……、言われたことない……」

「それは、舞が頼ろうとしなかったからだろ。もっとも、頼ろうと思えるだけの包容力が相手になかったとも言えるけど」

舞は瞼を閉じた。

なぜ、人は相手の心に入りたがるのだろうか。

どうして放つといってくれないのだろうか。

私は一人でやっていけるのに……。

「人は1人では生きていけないんだよ」

良太はまるで舞の心の声を聞いていたかのように話し始めた。

「相手の陽の部分も陰の部分も全て受け止めて初めて人は愛情を感じる事ができる。人に頼る事は決して悪い事じゃない。その勇気を

持っているかどうかで人の人生は大きく変わる。すぐには言わない。だけど、ほんの少しいい。俺に心を預けてみないか？」

「……………」

「それとも……、杉原の事が気なる？」

優の名前が出てきた事で、舞は顔を上げ良太を見た。

どう答えていいのかわからなかった。

気になるかと聞かれても優は涼子と付合っている。

優に甘い期待をしていた自分がいたが、見てはいけない夢だ。

舞は首を横に振ると、良太はクスツと笑って

「嘘はいけないよ。全身でアイツの事が気になるって言ってる。まずは、自分の心に素直になることを覚えないな」

良太は舞の前髪をかきあげると、額にそっとキスをし、自分の方へと抱きしめた。

「辛い時はいつでも俺の所においで」

第24章：本気の恋

良太にアパートまで送ってもらい、舞は部屋のドアの前に袋がかかっているのが目に入った。

なんだろうと思い袋の中に入っていた手紙を見る。

『おかえり。明日にでも温めて食べて 優』

中身を確認すると2つのタッパが入っていた。

優……。

わざわざ持ってきてくれたんだ……。

舞は袋を手に取り部屋の中へと入り、袋を机の上に置き床に座ると、舞は大きくため息を吐いた。

良太の事を恋愛対象として見た事はなかったから、突然の告白に舞の気持ちはかき乱れていた。

手にキスをされた時の感覚はまだ手に残っている。

思い出すと舞は頬が熱くなった。

あの時、手にキスをされ舞は体の芯から何かが湧き上がってくる感覚に襲われ、
そのまま良太の胸に抱きつき抱きしめられた
と思った。

良太を男として頭ではなく、体で感じたのだ。

ただ、手にキスをされただけで……。

そして、最後に抱きしめられた時にふと香ったタバコの匂い……。

アパートに着いて舞が車を降りる際、良太は

『舞が幸せになるのなら、舞の隣にいるのが誰でも俺はかまわない。
だけど……、幸せでないのならいつでも奪いにいくから』

と、言って去っていった。

舞は机の上に置いた袋に目をやった。

料理を作って持って来るなんて、女性が男性にすることだと思っけ
どなあ。

だけど、もう優しくしないで欲しい。

同情なんてして欲しくない。

とあるビルの地下のドアが開く。

「いらっしゃいます」

良太がカウンターに座るとバーテンダーが

「今日は何になさいますか？」

「いつもの」

「かしこまりました」

舞を送った後、車を置いて良太は飲みに来ていた。

“C a i t S i t h”（ケット・シー）は良太のお気に入りの店の一つだ。

アンティーク調に統一された店内は経営者の好みなのだろう。

店内にかかる音楽は会話の邪魔にならない程度の音量で心地よく耳に届いている。

バーテンダーが注文の品を良太の前に置くとそのまま立ち去る。

この店では無駄に客に話しかけないのが、良太が気に入っている理由だ。

一人になりたい時にはうってつけのお店だった。

良太はお酒を一口飲むとタバコに火をつける。

すかさずバーテンダーが灰皿を良太の前に置く。

タバコを一口吸うと、舞と初めて会ったときの事を思い出していた。舞と初めて出会ったのは今から8年前になる。

大学の悪友達に連れられて入ったお店が”スナック 秋桜”だ。

当時大学生だった舞は水商売をしているとは思えないぐらい大人しめで派手な感じのしない子で、
なぜこんな子が水商売なんてと思ったのが第一印象だった。

それはあきらかに良太が今まで付き合ってきた女達とは違う。

何度か通っているうちにふと気付く。

笑っているけど笑っていないように見える舞。

なぜそんな風に思えるのか不思議に思ったが、しばらくして気付いた。

ああ、この子は目が笑っていないのだと。

きつと心から笑えていないからなのだろう。

それに気付いた良太の心に舞に対する好奇心が顔を覗かせる。

それ以来、良太はいつも舞を目で追うようになり、結衣に舞の事を聞いた事もあった。

かなり酔っていた結衣はきつと覚えていないだろうが、舞の生い立ちを知ったのはその時だ。

親に暴力を振るわれたり、捨てられるなど、社会のひづみによくある話だと思った。

特に同情なんていう感情は出てこなかった。

しかし、時折見せる悲しげな表情。

人の輪の中にも決して人を受け入れようとしない舞に、良太は知らず知らずのうちに惹かれていつている自分に気付く。

きつと心から笑った舞いの顔は今とは比べ物にならないくらい魅力的だろう。

その笑顔を見て見たい。

いつしか良太はそんな思いを募らせていた。

今まで、良太は女性に不自由したことがない。

黙っていても女の方から寄って来るのだ。

一夜限りの女なんて吐いて捨てるほどいる。

それが、8年もの間ただ見守っていただけなんて……。

良太にとってはそれでもいいと思っていた。

他の男と付合っていると聞いても特に焦りはなかったし、ましてや告白などするつもりもなかった。

なのに……。

杉原の事を聞いた時、胸騒ぎがした。

それは直感だったのだろう。

自分が大切に見守っていた女性が心奪われるのではないかと。

いや、すでに舞の心は杉原の事が気になっているようだ。

そんな舞を見ていると、無性に自分の物にしてしまいたい衝動にかられた。

抱きしめて唇を奪い、そのまま自分の全てを舞の体に刻み付けたいと。

しかし、結局は手にキスをしただけで、舞の唇を奪う事すらしなかった。

そんな思いに良太は苦笑した。

本当に惚れた相手というのは簡単には手が出せないものなのか……。

自分の女関係を考えると、信じられない行動だ。

そして別れ際に言った言葉

『舞が幸せになるのなら、舞の隣にいるのが誰でも俺はかまわない。だけど……、幸せでないのならいつでも奪いにいくから』

自分の物にしたいという思いとは裏腹に、本当に舞を幸せに出来る男であればそれでもいいと本気で思っているのも確かだ。

そんな事を思っていると、マスターが良太の前にやってきた。

「最近、お顔を見ませんでしたね」

「ああ、仕事が忙しくてね」

「そうでしたか。ところで……」

そこまで言うともマスターは声のトーンを落とし

「あちらに座っている女性が、新見様とご一緒にいたいと言っておりますが……」

良太はマスターの視線の先に目をやると、カウンターの端に目鼻立ちの整った女性が1人でグラスを傾けながら座っている。

後腐れ無く一夜を過ごせそうな、良太好みの女だった。

今夜はその女と一緒に過ごすのもいいかとも思ったが、今日の良太の心を癒すには舞以外の女性はいないと思い直し

「マスター、悪いが今日はこれから先約があるんでね」

差し障りのない断りをいれる。

「お詫びに、1杯奢らせてもらつよ」

「かしこまりました」

マスターはカクテルを作ると、カウンターの端に座る女性に何か一言言って差し出す。

良太は女がこちらを見るのを確認すると、自分のグラスを女の方に向け乾杯の仕草をした。

そのグラスを飲み干すと、お会計を済まし店を後にした。

第25章：疑惑2

月曜の夜、舞は優と一緒にアパートまでの道のりを歩いていた。

一緒には帰りたくないと思っていた舞だが同じ仕事をし、同じアパートでは他に用事でもない限りそうはいかないようだ。

いつもなら、よくしゃべりかけてくる優だが今日は押し黙ったまま舞の隣を歩いている。

昨日のお礼を言いたかったが、ずっと押し黙っている優に舞はお礼を言うタイミングをなくしどうしたものかと考えていた。

そして沈黙を破ったのはやはり優だった。

「昨日さ……、何処に行ってたの？」

その口調は少し咎めるようだった。

「えっ……、あっ、うん、ちょっとね」

舞は曖昧に誤魔化す。

再び、沈黙が続き

「アイツとはどうゆう関係なの？」

アイツ？

質問の意味が分からず黙って優を見上げると

「営業部の主任」

「新見主任のこと？」

優は舞の方を見る事なく真っ直ぐ前を向いたままだ。

「昨日一緒にいた相手ってアイツだろ」

「えっ！　なんで知って……」

舞は驚いたが、言葉の最後まで言う前に優の言葉が遮った。

「昨日、車から降りて来るのを見た」

優の責めるような言い方に舞は多少ムツとした。

自分は蘭田さんと付合っているのに、なんで新見主任と一緒にいただけで、優に責められなければいけないのだろう。

「だから、何？　私と新見主任が一緒にいたからって、責められることはしてない」

優は立ち止まり舞を振り返った。

「アイツの事、好きなの？」

その表情は怒っているようなそして辛そうにも見えたが、急に思いがけない質問をされ舞は少し強い口調で言い返した。

「なっ、なんでそんな事聞くの。私と新見主任と一緒に居たって優には関係ないでしょ！」

「関係ないことないだろ！」

優の口調も強くなる。

「それに……、優だって人のこといえないじゃない」

「どうゆうことだよ」

「蘭田さんのこと……」

「蘭田さん？」

憂はなぜ涼子のことが出て来るのかわからないといったようすだ。

「だってそうでしょう。私、見たんだから。蘭田さんと踊り場で抱き合っていたのを」

憂は目を丸くして驚いていた。

「いやっ……、あれはそんなんじゃ……」

「蘭田さんと付き合ってるんでしょ」

優は舞の両腕を掴み

「舞、ちゃんと聞いて。蘭田さんとの事はそんな関係じゃ……」

「もう、私にはかまわないで！」

優が最後まで言い終わらないうちに、舞は優の腕を振りほどいてその場を走り出していた。

第26章：誤解1

舞は月曜の夜に優と喧嘩別れをした為気まずくなってしまい、あの夜以降一緒には帰りたくなかった舞はわざと用事を作り、優を避けるようにして1人でアパートに帰るようにしていた。

そんな舞の様子に何か言いたげな優だったが、会社ではその機会を作る事も出来ないでいたようだ。

一体こんな状態がいつまで続くのだろう。

同じアパートに住んでいるというのは、こうゆう時非常に不便だな。いつそのこと引越してもしよつかと思えてしまう。

「七海さん、ちょっといいかね」

舞は呼ばれた部長席までいくと

「この前言っていた新しい企画の打ち合わせ、金曜日に木戸商事に16時から決まった。打ち合わせが終ったらそのまま直帰してもらってかまわないから。それと営業部からは細川君が一緒に行くそうだ」

「そうですか。わかりました」

舞が自分の席に帰ろうとした時

「それと、杉原も一緒に連れていってくれ」

「杉原君もですか？」

「ああ、一緒に行った方が仕事もスムーズに進むだろ」

「……はい」

打ち合わせで直帰できれば、それだけ優と一緒に帰らなくてもいい
と思ったのだが……。

舞は自分の席に戻り

「杉原君、金曜日の16時から木戸商事で打ち合わせが入ったから
予定しておいて」

「2人で行くんですか？」

「違うよ。営業部の細川さんと3人」

「わかりました」

そう言うと、優は止めていた手が再びキーボードの上を動き出した。

舞は明日に打ち合わせが決まった為、遅くまで打ち合わせの資料を
作っていた。

時計を見るともうすぐ21時47分を指していた。

ヤバイ、22時になるまでに会社出なきゃ。

隣を見るとやはり優もまだ仕事をしている。

舞は優に帰る事を告げ、慌てて資料のデータを保存しパソコンの電源をおとした。

さすがに時間が遅い為、他へ寄り道する訳にもいかず舞は仕方なく優と一緒に駅へと歩いていった。

すると、舞の目線の先に見覚えのある男性が声をかけてくる。

「杉原君？」

「そうですけど……」

突然名前を呼ばれ、優は警戒心をあらわにして答えた。

「君……、園田涼子と付き合ってるの？」

優は相手を睨みながら

「……人に物事を聞くときは、まず自分の名前を相手に言うのが礼儀じゃないんですか」

「ああ、悪いね。私は経理部の長岡だ」

経理部の長岡さん……、だから見た事があつたんだ。

長岡は会社の中でも目立たないタイプで、あまり経理に顔を出す事のない舞は、すぐには誰かわからなかった。

眼鏡を掛けているその顔立ちは神経質そうで、いかにもお金の管理をしている經理の仕事が合いそうな感じた。

「俺、自分のプライベートを他人にしゃべる趣味はないんだけど」

優の言葉に長岡は一重まぶたの目を細め、優を睨んだその時

「長岡さん！」

背後から声が聞こえ、舞が後ろを振り返るとそこには涼子が立っていた。

「何してるんですか、こんな処で……」

残業していた涼子が22時を超えないように退社してきた所のようにだ。

この状況を見て、涼子はあきらかに困惑している様子だった。

舞は今のこの状況についていけずオロオロしながら優の顔を見たが、優は平然とした態度で長岡と涼子を見守っている。

長岡は急に涼子が現れたことで一瞬と惑っていたが、意を決したように涼子に向き合った。

「涼子……。お前……。杉原と付き合ってるのか？」

「……そんな事、……長岡さんには関係ないでしょ」

長岡の質問に動揺を隠せないように、涼子は目線を下に向けた。

「それに、聞いたところで、あなたには結婚を前提としたお見合い相手がいるじゃない」

涼子の言葉に長岡はばつの悪そうな顔をした。

「確かに、部長に言われてお見合いはしたが……」

長岡の言葉が言い終わらないうちに頬を涼子が叩いた。

「そんなに出世が大事なの！」

涼子の目には涙で溢れ今にもこぼれ落ちそうになっている。

「信じてたのに……、あなたの事……信じてたのに……」

もはや、涼子目からは止どめることの出来なくなった涙が頬をつたって流れ落ちていく。

長岡は涼子の両肩に自分の手を置くと、涼子は長岡の手を振りほどこうとした。

しかし、あまり体格が良くない長岡だが男性の力強い手に、涼子は手を振りほどく事が出来なかった。

「人の話は最後までちゃんと聞け！」

長岡はイラついたように声を荒げて言うと、涼子はビクッと体を震わせた。

「確かにお見合いはした。部長から言われてどうしても断る事が出来なかったんだ。でも、涼子が杉原と社内によく見掛けるようになって……。俺……。すっごく後悔した。他の男のに取られそうになって、ようやく自分のした事の愚かさに気付いたんだ」

「……………」

「……涼子、……もう一度俺とやり直さないか……？ いや、やり直して欲しい。……勿論、結婚を前提として」

長岡の言葉に涼子の瞳は信じられない言葉を聞いたかのように大きく見開いた。

「……本当に……？」

「ああ、大切な人を無くしてまで、上司に従うつもりはない」

「……長岡さん」

涼子は瞼を閉じると、長岡は涼子を抱きしめた。

優は舞の腕を掴み歩き出した。

いきなりの展開に舞は頭がついていけない。

優に腕を掴まれたまま、涼子と長岡が見えなくなるまで歩いた所でようやく口を開く事ができた。

「……ねえ、一体どうゆうこと？」

舞の質問に優は立ち止まる。

「どうつて、見ての通りだよ」

「見ての通りつて……、蘭田さんは優と付き合ってたんじゃない……」

「付き合っていないよ」

優はため息を吐きながら答えた。

第27章：誤解2

「あの時、説明しようとしたら人の話も聞かないで走り去って行っただろ。その後もずっと俺の事避けてるし」

睨むようにして言う優に、舞は優の視線を避けるように下を向いた。優の話では、涼子は入社して1年程たった頃に長岡と付き合い始めたが、社内恋愛はいろいろ周りがうるさく2人は周りに内緒で付き合っていた。

しかし、長岡は30過ぎても結婚していないのを心配した直属の上司である部長が、お見合いの話を持って来たのだ。

涼子との事を会社に内緒にしていた長岡は、上司からの話という事もあり断りきれずにお見合いをした。

それを知った涼子はその当てつけに、優と付き合っているふりをし、欲しいと話を持ちかけてきたのだ。

2人が付き合っているのを知っているのは相原友香だけで、内緒で付き合っているために他の人には相談出来ず、ちょうど転勤で同じ部署に配属になった優に彼氏役を頼んだらしい。

「引っ越しを手伝ってもらったお礼に行ったお店でその話をされて、最初は断ったんだよ。　　だけど、部署が違うから社食で一緒に昼食を食べるだけでいいからって言われてさ。　　それでしばらく一緒にいたけどやっぱりこんなことは良くないって話を踊り場ですていたのを舞がみかけたんだよ」

……そう……だったんだ。

結局、優と涼子の事は私の早とちりてこと？

それにしても、意外な組み合わせだなと舞は思った。

男子社員に人気のある涼子と、お世辞にも女性にもてるとはいえないタイプの長岡が付き合っていたなんて……。

「これで舞の疑念は払拭されたよな」

舞は顔を上げると優は腕をくみ、右手を顎にあてながら舞を見下ろしていた。

「今度は俺の疑問に答えてもらいたいんだけど……」

「疑問って……」

「営業部の主任とのこと」

優は相変わらず良太の事を名前では呼ばずにいたが、その口調は不機嫌そのものだ。

「新見主任のこと？」

優は目を細め

「忘れたとは言わせない。俺、あれから気になってずっと睡眠不足なんだからな」

近寄って来る優から逃げるようにあとずさると、背中に壁が当たりその場から動けなくなった。

優は舞の両肩近くの壁に両手をつけ、舞が逃げないように左右を塞いだ。

「で、アイツとの関係は？」

優は舞の顔に自分の顔を近付け聞いた。

顔を近付けられ、しかも身動き出来ない状態に舞は心臓が飛び出るのではないかと思うほどドキドキしている。

舞はせめてもの抵抗に視線を優から外した。

「関係も何も……、新見主任とは私が大学生の時に知り合った人で……、特別な関係なんかじゃない」

「ふーん……。でも、向こうはそうは思ってたさそうだけど？」

優の言葉に河原での出来事が脳裏によぎり顔が赤くなった。

幸い暗い住宅街では顔が赤くなったのは気付かれていないだろう。

「舞はアイツの事どう思ってるの？」

「……どうも……、思っていないよ……」

「じゃ、俺の事は？」

急に話を変えられて驚いて目線を上げる。

優の真剣な眼差しと視線がぶつかり、そのまま視線を逸す事ができなくなった。

「俺の事はどう思ってる？」

どうしよう。

なんて答えたらいいんだろう……。

優の事は心惹かれていると思う。

これは好きと言う事なんだろうか……。

好き？

ああ、そうか。

いつのまにか優の事で気持ちが一杯になっていたから、こんなにも苦しいんだ。

自分の気持ちに気づいた舞だが、それを口に出すかどうか戸惑った。

しかし、優の舞を見る眼差しが質問への答えに有無を言わせなかった。

舞は小さく息を吸って自分の思いを伝えた。

「……す、き……」

とても小さな声だったが優は舞の言葉を聞くと、優しい笑顔になり

「俺も、……俺も舞の事が好きだ」

優は舞の頬に右手を添ると、舞の唇の感触を確かめる様に自分の唇を重ねる。

そのまま自分の舌を割込ませると、逃げ腰になっている舞の舌を強引に絡めとり、
息が出来なくなる程長く深い口付けをかわす。

ようやく唇が開放された時には舞は腰に力が入らず、優が手を回し支えてくれた。

「大丈夫？」

放心状態の舞は言葉が出ず、かろうじて首を縦に振った。

優は照れたように言う。

「俺、嬉しかったよ。舞から好きって言葉が聞けて。唯一残念なのはこじや押し倒せないことだな」

悪戯そうな笑顔を作り舞の頬にキスをした。

「歩ける？」

少しずつ自分を取り戻し始めた舞はようやく言葉が出た。

「…………だっ、大丈夫…………」

アパートに着くまでの間、優はずっと舞と手を繋いだままだった。

人前では手を繋ぐのは恥ずかしいと舞が言いつと、また逃げられたら困るからと、冗談ばく笑って言った。

アパートの前に着くと優が顔を近付けてきたので、またキスされるのかと思ったが

「俺の部屋、寄ってく？ 舞の部屋でもいいけど」

と、艶やかな声で舞の耳元で囁き、耳朵を軽く噛んだ。

その行動に心臓を掴まれるようにドキッとした。

それって…………、誘ってるんだよね…………。

もちろん舞も経験がないわけではないが、こんなふうに誘われるとどうしていいかわからなくなる。

「きよ、今日は…………もう…………遅いし…………」

舞はしどろもどろになりながら言いつと、優はククツと笑い出した。

「舞って、からかうとホント面白いのな」

…………からかわれたの…………。

「もっつ！ 知らないっ」

舞は呆れてアパートの階段へと歩き出した。

「ごめん」

舞を追いかけてきた優は後ろから舞を抱きしめる。

急に後ろから抱きしめられ再び心臓がドキツとする。

「からかって、ごめん……。でも、舞を抱きたいのはホント。……。
だけど、今日はやめとくね。これ以上調子に乗って舞に嫌
われたくないから」

優は少しの間後ろから舞を抱きしめていたが

「おやすみのキスしていい？」

と、耳元で囁いた。

舞が小さく頷くと、舞を自分の方に向け額にキスをし

「じゃ、また明日」

そう言って優は自分の部屋へ帰って行った。

舞は自分の部屋に帰るとへなへなと床に座り込んだ。

まだ心臓がドキドキしている。

優ってちょっと慣れすぎてない？

それに私、好き……って言っちゃった……。

優にも好きって言われて……。

思い出すと頬が熱くなってきた、舞は両手で頬を押さえた。

第28章：敵意1

舞と優は木戸商事へ打合わせに行くため営業部の細川と待ち合わせている会社のロビーいた。

お互いの思いを伝えあったあの日以降、優は必ずアパートの前で舞を抱きよせキスをして別れるようになったが、あの時のように部屋に誘われるは事なかった

「悪い、待たせたな」

細川が来たのかと思い舞はエレベーターの方を振り向くと、そこに立っていたのは良太だった。

「新見主任……？」

「細川が別件でトラブってどうしても手が離せなくてな、俺が代行で行くことになったんだが……」

舞いに向けて話していた良太は、言葉の最後の方で優へと視線を向けた。

「なんだ、君も一緒か……」

「僕が一緒だと何か都合の悪い事でも？」

良太を見ている優の顔にはあきらかに不満を露にし睨み付けている。2人の間に何故か火花が散っているように見えるのは気のせいだろ

うか……。

舞は2人の間に挟まれて冷や汗が出てきそうだ。

「じゃ、行こうか」

良太は舞の方へ振り向くと、舞の肩に腕を回し歩き出した。

腕を肩に回された舞は自然と良太と一緒に歩く事になってしまい、焦った。

「あつ、あの、新見主任！」

良太はどうしたの？ といった感じで舞を見る。

「肩に手が……」

「ああ、悪い。つい癖だね」

良太は悪びれた様子もなく笑顔で肩に回した手を離れた。

チラッと優に視線をやると、ムツとした様子で横を向いている。

怒ってる……よね……、やっぱり……。

舞は心の中でため息を吐いた。

このメンバーで打ち合わせに行くには無理があるんじゃない……。

これからの事を考えると、気分がユウツな気分になる。

「早く行こう。時間に遅れるぞ」

何事も無かったように明るい声の良太。

あらかじめ呼んでおいたタクシーに乗込むと、役職の付いている良太、優の先輩なる舞が後ろに乗込み、優は助手席に座った。

「そういえば、この間は楽しかったね」

タクシーが走り出すと、優の前では触れて欲しくない話題を良太が思い出したように舞に話しだした。

「えっ！ ああ、……そう……ですね。あの時は、ありがとうございました」

「いいよ。舞が望むなら何処にでも連れってやるよ」

良太は終始笑顔を舞に向けているが、あきらかに優に対して挑発しているとは思えない。

いつもの良太なら決して人を挑発するような事はしないのに……。

助手席に座っている優は一言も言葉を発しない。

しかし、後ろから見える横顔は明らかに怒っている気がする。

舞はこの場から逃げ出したい気分だった。

木戸商事に着き、打ち合わせに入ると先程とはうってかわって仕事

モードになった良太に、舞はホツとしながら仕事に専念した。

優と一緒に打ち合わせに来てはいるが、あくまでもサポート役な為、会社を出てから一言もしゃべる事はなかった。

舞にとっては、しゃべらない優のほうが恐怖を感じてしまう。

後で絶対何か言われるんだろうな……。

無事打ち合わせが終わり木戸商事のビルを出ると、すっかり陽は沈んでいた。

「今日は直帰するだろ？」

「はい」

良太の質問に舞は手短に答え、さっさとタクシーを捕まえて帰ろうと考えていた。

「じゃ、これから飲みにもいかないか？ 近くにいい店があるんだ」

いつもの明るい笑顔で言う良太に、これ以上一緒にいて胃が痛くなる思いはしたくなかった舞は断ろうと口を開きかけた時

「杉原君も一緒にどう？ それとも、俺と一緒にじゃお酒は飲めない程、度胸のないヤツじゃないよね？」

良太の言葉に優はキツと良太を睨み

「いいですよ」

一瞬の沈黙の後、低い声で答えた。

優の返事を聞いて舞は目眩がしそうになるのを必死でおさえた。

優のバカ！

なに挑発にのってんのよ！

信じられない。

もう、やるならふたりで勝手にやって。

そう思い舞は1人で帰ろうと歩きかけると良太に腕を掴まれた。

「おっと、ヤローふたりだけで飲んでも全くうれしくない。舞もおいで」

良太に強引に腕をひかれ、無理矢理店に連れていかれた。

第29章：敵意2

「やっぱ、お酒と言えば焼酎が一番だよな」

良太と向かい合わせに優と舞が座り、良太は楽しそうにメニューを眺めている。

入ったお店は焼酎居酒屋だった。

「杉原君は、お酒飲めるんだろ？」

「……ええ」

良太とは対照的に優はムツとした表情を崩していない。

「じゃ、最初は俺のお勧めでいい？」

そういうと、良太は店員を呼びお酒と料理を適当に頼んだ。

舞は良太の意図がよくわからずに困惑している。

なぜ、この3人で食事をしなければいけないのだろう……。

ああ、早く帰りたい！

そんな舞の気持ちを知ってか知らずか、良太は運ばれて来た焼酎のグラスを持ったが

「乾杯……って、雰囲気じゃ……なさそうだな……」

結局、持ったグラスをそのまま自分の口元に運び一口飲んだ。

「大学時代の友人に熊本出身の奴がいてね、そいつとつるむようになってから焼酎にハマっちゃってさ。杉原君は毎日晚酌はする方？」

「ええ、まあ」

「いつも何飲んでるの？」

「缶ビールと焼酎です」

良太はお店に入ってから舞ではなく優にずっと話しかけ、優は良太の質問に不機嫌ではあるが一応丁寧に答えている。

しかし、舞にとってはそんなことはどうでもよく、その場の居心地の悪さについてお酒のピッチが早くなっていく。

「焼酎は何飲んでるの？」

「部屋では、です」

「の麦焼酎ね。普段飲むにはお手頃でいい焼酎だね。××は飲んだ事ある？」

「ああ、あれは旨いですよね」

しぶしぶながら話していた優だったが、営業で普段人と話すのがうまい良太とのトークは、元々お酒が好きなこともあってかだんだん話が焼酎トークで弾み始めた。

そんな様子を見ていた舞は、ため息を吐いた。

なんなんだろこの2人は……。

あんなに陰悪だったのに……。

女性では決して有り得ないシチュエーションに舞はますます困惑してしまふ。

グラスが空になった舞は新しくお酒を頼む。

打ち合わせに行く時とは違い幾分か和んできたところで、店を出ることになった。

飲み過ぎたせいやお手洗いに行きたくなった舞は、良太と優の2人きりにするのはどうかと思ったが、断りを入れて洗面所へと向う。

良太と優は店の外で舞を待つことにした。

優は幾分か話をするようになったが、打ち合わせに行く時の挑発な態度と店でのフレンドリーな態度とを考えると、一体良太が何を考えているのか計り兼ねていた。

良太はタバコに火をつけ吸った煙を細く吐いた。

「舞は渡しませんから」

お店にいた時とは違い沈黙が2人を包んでいたが、優は良太を真つすぐ見据え低くハッキリと言った。

良太はタバコを口に運びながら薄く笑みを浮かべている。

「君は……、本当に彼女を受け止める事ができるのか？」

何か含みのあるような口調に優は目を細める。

「あなたが何を知っているのかは知りませんが、俺は俺なりのやり方で舞を受け止めるつもりですよ」

「せいぜい、お手並み拝見させてもらうよ」

良太はふつと笑い携帯灰皿でタバコを消した。

「じゃ、これで俺は帰らせてもらう。同じアパートに住んでるんじや俺が送ってく訳にはいかないからな」

良太は背中を向け歩き出したが、ふと足を止め肩越しに振り返りニヤリと笑った。

「そうそう。舞の事狙ってるヤツ、社内に結構居るって知ってたか？ ライバルは俺だけじゃないぜ」

優を背に右手を軽く振りながら、夜の街へと歩いて行く良太の背中を忌々しく思いながら見送った。

ム力つくヤローだな。

なんだよ、あの余裕しゃくしゃくな態度は！

良太の姿が見えなくなる頃、舞が店から出て来た。

「あれ、新見主任は？」

キヨロキヨロと辺りを見渡している。

「先に帰ったよ」

「えっ、先に帰ったの？」

予想外の展開に舞は驚いていた様子だった。

「帰ろう」

優は舞の手を取りタクシーの拾える大通りまで歩いた。

「新見主任と何かあったの？」

「いや、別に……」

優の素っ気ない言い方が気になるのか舞は質問を続ける。

「何……、話してたの？」

「ん？ 男同士の話……」

言葉少なめに語る優に舞は疑問に思っている様子だったが、そのまま口を噤んでしまった。

タクシーを降りると舞がおやすみを言って自分の部屋へ帰ろうとした時、優は舞の腕を引っ張り歩き出した。

「……優……？」

優は自分の部屋の鍵と扉を開けると、強引に舞を部屋へと入れた。

扉が閉まり優は鍵をかける。

優の不審な行動に舞は戸惑っているが、優は強く舞を抱きしめ唇を重ねた。

力強い腕にほとんど身動きが取れないままの舞に、いつもより強引に口を開かせ、口内をむさぼるように何度も角度を変えながら舞の舌を絡めとる。

唇が離れると耳元で囁くように

「今日は帰したくない」

舞が優の言葉に体が少し強張っていたのがわかったが、良太に挑発され余裕のある態度を見せつけられた優は、舞の心も体も全て知りたいという気持ちが押さえきれなくなっていた。

優は舞を抱き上げるとそのままベッドに寝かせ、覆い被さるように長く深く唇を重ねる。

唇が離れると舞の首筋にキスをし、優の手が舞の胸に触れる。

その瞬間、舞の体が震えるようにビクツとした。

その反応に優が顔を上げると、舞は両目をギュッと瞑り顔を横に向けていた。

「……………舞……………？」

何かにジツと耐えているその様子に声をかけると

ゆっくりと瞼を開け、少し脅えるような眼差しが優を射竦めた。

その瞬間、罪悪感が湧き上がってきた優は瞼を閉じ、小さくため息を吐くとそつと舞を抱きしめた。

「……………ごめん。……………俺、ちょっと焦ってた。アイツに挑発されて……………、舞の気持ちも考えずに先走ってた。……………もう、無理に抱こうなんてしないから、しばらくのこのままでいさせて……………」

すると、舞の腕が優の背中に回されるのを感じ、優は体を起こし舞を見た。

「ううん。私の方こそ……………ごめんなさい。でも、大丈夫だから。だから……………、このまま抱いて欲しい」

「……………」

「私ね、いままでいつも逃げてた。いろんな事から逃げる事で自分を安全な位置に置いて、出来るだけ傷つかないように……………、人との

関係もそう。でも、優なら……、優となら逃げずにちゃんと向き合えるかなって思ったの。いつまでも逃げてばかりではなにもかわらないから……」

優は愛しそうに舞の髪をなでる。

「無理……、しなくてもいいよ」

舞は首を振った。

「無理なんしてない。今、優が欲しいの」

「……舞……」

優は額に瞼に頬にそして唇にそっと口づけた。

「ホントに、いいの？」

舞は言葉の代わりに、優の背中に回した腕に力を込めてギュッと抱きしめ、自らの唇を優に押しあてた。

それに応えるように優は舞を抱き寄せた。

第30章：至福の時

薄らと目を覚ました時、目の前に優の顔があり焦った。

体を動かそうとしても、優の腕がしっかりと舞を抱き寄せていて動けない。

あつ、そっか……、昨日……。

舞は優の寝顔を見つめていると、自分のなかで優への愛しい気持ちが湯水のように沸き上がってくるのを感じた。

いままでこんなふうに誰かを愛しいと思えたのは初めてだ。

優の肌から直接伝わってくる温もりが、舞の全てを温く包み込んでくれている気がする。

こうゆづのを幸せっていうのだろうか……。

誰かと一緒に迎える朝が、こんなにも自分の気持ちを穏やかにさせてくれるなんて……。

そんなことを思いながら優の寝顔を見ていると、優がゆっくりと瞼を開け

「…………おはよ」

舞の顔を見てはにかんだように言った。

「……おはよう」

優の寝顔を見ていた舞は急に恥ずかしくなり、目線を優の鎖骨辺りに逸らす。

それを見た優はニヤツと笑い。

「舞、顔赤くなってる」

そう言われるとますます顔を上げられなくなってしまった。

「昨日の舞の顔も好きだけど、そうやって赤くなっている舞もかわいい」

「やだっ！ もうつ……」

優の言葉に舞はベッドから出ようとしたが、優は舞を抱きよせ軽く唇を重ねた。

「そのままベッドから降りると丸見えだよ」

そう言われ舞は優の腕から出るに出れなくなってしまった。

そんな舞を見て優はクスツと笑い

「ずっとこうしていたいけど、お腹も減ってきたし、俺シャワー浴びてくる。その間に着替えて舞も部屋でシャワー浴びてくれば？ 舞が戻って来るまでに朝食用意しておくから」

「うん……。ありがとう」

「それとも……、一緒に風呂入る？」

舞が顔を上げて優を見ると、悪戯そうな顔で舞を見ている。

「もうっ！　優っ！」

舞は怒ったように優の胸を軽く叩いた。

「鍵置いとくから、戻ってきた時に返して」

優は笑ってベッドから降り、鍵を机の上に置いて浴室へと消えて行った。

舞は着替えて自分の部屋に戻り、シャワーを浴び、一通り支度を済ませると再び優の部屋へと戻った。

鍵は持っていたが、勝手に開けて入るもの気がひけチャイムを鳴らす。

「鍵持っているんだから、開けて入ってくればよかったのに」

部屋に入ると優が言った通り朝食に野菜がたっぷり入ったサンドイッチとコーヒーが用意されていた。

それを目の前にして座った舞は小さくため息を吐いた。

「どうしたの？」

「優ってすごいなあって思ってた……。普通、こうゆうのって女性が

男性にすることですよ。私、やれって言われてもきつと出来ない…」

「別に無理してやる必要はないんじゃないの？ そりゃ女の人料理が出来たにこした事はないだろうけど、人には得意不得意があるからね。今時、家事の分担なんて何処の家でも普通にやっていると
うけどな」

「……そうかなあ」

それでも落ち込んでいる舞を見て優は

「じゃ、お昼は一緒に作る。俺が料理教えてやるよ」

「……教えてくれるの？」

「ああ、1人より2人で作った方がきつと楽しいだろうし」

優は舞の頭をクシャツと撫で

「さあ、食べよ」

舞は優の作ったサンドイッチを食べた。

教えてもらえるのはうれしいけど……。

ちゃんと作れるかな……、私……。

お昼前に2人で買い出しに出かけ、昼食と一緒に作っていると

「舞ってさ……、ちょっと……不器用すぎないか？」

優の呆れた声で舞は少し頂垂れた。

「会社ではしっかりしてて何でも出来るイメージがあったけど……」

ええ、ええ、どうせ私は不器用ですよ。

「これって、どうみても5mmはあるよな……」

優は舞が剥いた人参の皮を見ながら言った。

「だって……、今は皮むき機あるし……、適当に切って鍋に放り込めばとりあえず何かできるし……」

舞の言葉にますます優は呆れたようだった。

「まあ、気長にやればいいよ」

結局ほとんど優が昼食を作ってくれ、包丁さばきの良さに改めて感動した。

「練習さえすれば、ちゃんと出来るようになるから」

朝に続き落ち込んでしまった舞を優は励ましてくれたが、舞にとっては立場がなかった。

そんなまったりとした土日と優と一緒に過ごし、舞にとっては今までになかった甘い至福の時を感じる事のできた週末だった。

第31章：母親

数日後、木戸商事へ再び打ち合わせに行く事になった。

本来の担当者である細川は外回りに行つてから直接行くと伝言があった為、優と舞は2人で木戸商事へ向かう。

無事に打ち合わせが終りビルを出ると、すでに陽は沈みサラリーマンやOLが帰宅する為か忙しく歩いている。

優と舞は打ち合わせが終ればそのまま直帰する予定になっている為、細川と別れて駅へと大通りを歩いていた。

舞はふと前からこちらに向かって歩いてくるひとりの女性に目が止まった。

ガラの悪そうな、いかにもチンピラといった感じの30代後半ぐらいの男性と腕を組んで歩いている。

最初は遠くてよくわからなかったが、近づいて来るにつれその女性が誰なのか確認できるようになると、
舞は体が硬直し顔を
下に向けたままその場を動けなくなった。

急に立ち止まった舞に優はこちらを振り向き

「どつしたの？」

優の問いかけにも舞は答えることができない。

優がもう一度舞の名前を呼んだ時、前から歩いてきた女性が舞の横を通り過ぎようとしていたが、
舞の名前を聞いて立ち止まり振り向いた。

女はジッと舞の方を見ている。

「……舞、……舞なの？」

女は確認するかのように舞の名前を呼んだ。

「驚いた。こんな所で会うなんて……」

「……………」

「あら、もしかして私の事忘れたの？ 薄情な子ね」

舞はようやく女の方をゆっくりと振り返った。

「……………お母さん……………」

舞がお母さんと呼んだその女は47歳になったとは思えない程若く見えた。

母親である美樹の隣に居た男は、舞の言葉を聞いて心底驚いた様子だ。

「美樹、お前子供いたの？」

「ええ、19の時に生んだのよ。もうずいぶん会ってなかったけど……、何年ぶりかしら、
10年以上経っていると思うけど

……、ハハハッ……忘れちゃった」

自分の娘との久々の再会だとは思えない程どうでもいいといった態度だ。

「あんた、今何処で働いてるの？」

美樹の問いに舞は社名を答えると

「ずいぶんといい所に就職したのねえ」

美樹は舞を観察するように見た後、その目線を優の方へと移し、頭から足の先を品定めするように見た。

「いい男ねえ。もしよかったらうちの店に遊びに来ない？ いい子がたくさん揃ってるわよ」

甘ったるい声を出しながら美樹はバックから名刺を出すと優に渡した。

名刺には“クラブ ルージュ”と書いてあり、美樹が経営しているお店だった。

「あなたは、舞の彼氏？」

「はい」

短くハッキリ答える優に美樹は面白そうに笑い

「じゃ、あなたは知ってるのかしら」

美樹は舞を一瞥すると

「この子が母親の男を寝取った事があるってこと」

舞は美樹の言葉に顔を強張らせた。

「ねえ、舞。そうだったわよね」

舞は下唇を噛みながら横を向いた。

なんで、こんな所でそんな事を言うの……。

美樹の貶めるような言葉に舞は怒りが込みあげてきた。

「あなたも気づけた方がいいわよ。何をしでかすかわからない子だから」

美樹は優に向かってニツコリと笑うと、一緒にいた男の腕に自分の腕を絡めてその場を去って行った。

「……舞」

気遣うような優の言葉に舞は泣き出したい気持ちを必死に押さええていた。

そして、優の言葉が聞こえなかったように舞は黙ったままゆっくりと歩き出す。

その後を追うように優が舞の肩に手をかけた。

「……舞！」

舞は優の手を振りきり逃げるようにその場を走り去った。

第32章：過去4

- - 舞12歳 - -

小学生の高学年にもなると、舞は自然と遅く帰るようになった。

放課後から解放されている学校の図書室や大型のショッピングセンターなどで時間を潰し、
夜の仕事に出かける母親の美樹と顔を会わさないようにしていた。

顔を会わさないことで美樹の不興をかわないように、
そして遅く帰る事で美樹と美樹が連れ込んだ男が体を重ねている場面に
出くわさないようにという思いもあったからだ。

そんな毎日の中、舞が小学校6年の冬ごろから美樹のつきあっている男、友也がそのまま家に居着く。

そんなことは今までにもよくあったことだった為、
舞は気にしていなかったがいつの頃から友也の視線がよく舞に向けられているに気づいた。

最初は気のせいかと思っていたが、執拗に向けられる視線に不快感を覚え始める。

しかし、何かを言うてくるわけでもない友也に対して、ただその視線から近づかないようにしていた。

そして、中学に入学して2週間程たったある夜。

寝ていた舞は、体の上からのしかかるような重みに目が覚めた。

「静かにしろっ！」

友也の顔が目飛び込んできたその瞬間、舞は手で口を塞がれた。

「静かにしてな。でないと美樹が起きるぞ」

舞は何が起こったのかがまったく理解が出来なかった。

なぜ、友也が舞の布団にいるのか。

状況が理解出来ない舞に友也は手で舞の口を塞いだまま、唇で首から鎖骨にかけて愛撫し始め、
その行為に舞は体の震えと嫌悪感が体中に湧きおこる。

舞はその場から逃げ出したかったが、初めて男に体を触られ恐怖感で体が動かない。

友也は舞の上着に手を入れると、這うようにして胸まで辿り着き触りだした。

そしてその手は、ズボンの中に入っていき下腹部へと移っていく。

「やっ！」

口元を塞いでいた手が緩んだその時、舞の口から言葉が漏れた。

その声は思ったよりも大きく、友也はギョッとして隣の部屋の様子を伺うように動きを止めた。

少しして、隣から物音が聞こえ襖の隙間から部屋の明りが漏れた。

そして、美樹が襖を開ける。

舞と友也が同じ布団にいる姿を見た美樹は、大きく目を見開き2人を見下ろす。

友也は舞から飛び退くように、美樹に近づいた。

「美樹！　ちつ、違うんだ。これは……」

そこまで言いかけて友也は舞の方を見ながら人差し指を指し

「……アイツが、……アイツが誘ってきたんだ」

友也の言葉に美樹の顔はいままで見たこともない怒りに満ちた形相をし、舞をきつく睨んだ。

その目は娘に対してではなく、舞をひとりの女として嫉妬を露にした目だった。

舞は息を飲むようにして座ったまま後ずさる。

美樹はゆっくりと舞に近づくと平手を舞の頬に打ちつけた。

「このっ！　泥棒猫！」

畳にうつぶせるように投げ出された舞の体を美樹が引っ張り上げ、もう一度平手で舞の頬を打つ。

「誰のおかげで……、誰があんたをここまで育ててやったと思っているのっ！　それを……、人の男を寝取るなんて！」

怒りに狂った美樹は無抵抗の舞に殴る蹴るの暴行を始めた。

最初は見ていた友也だったが、いつこうに止まる気配のない美樹に不安を覚え止めに入った。

「おい、美樹、やめろよ。それ以上やったらコイツ死ぬぜ」

友也の制止にようやく手を止めたが、美樹は肩で息をしながらグツタリと横たわる舞の事を睨んでいる。

「あんたを生んでからまったくロクなことがない！　いつその事、死んでもらった方がよっぽど気楽だよっ！」

美樹は吐き捨てるように言って、隣りの部屋へと消えていった。

暗い部屋に一人残された舞は、口の中に広がる鉄の味を噛みしめていた。

常識で考えれば12歳の舞が男を誘惑する訳がない。

あきらかに友也の方に非があるのに、美樹はまったくそれをみようとしない。

舞は心が壊れたかのように涙一つ出てこなかった。

翌日、舞が学校から帰ってくると美樹と友也の荷物があらかたなく

なっているのに気付く。

不信に思った舞だったが、なぜか誰にも知らせる事はしなかった。

次の日もアパートに美樹と友也が帰ってきた形跡はない。

そして、部屋に鳴り響いた電話で美樹と友也の状況を知る事となる。

前から借金のあった友也は返済が出来なくなり、店のお金を持って美樹と共に姿を消したらしい。

すぐに警察がやってきて舞も事情調書をとられた。

しかし、舞の保護者は美樹しかなかった為、身元引受人としてすぐさま親戚に連絡がいき美樹のやったことが親戚中に知れ渡った。

警察からは身元を引き取ってくれたものの、ただでさえ親戚から疎まれていた美樹と舞だった為、厄介者扱いされ舞の引き取りが決まるまでの一週間を、お金を渡されアパートに1人で暮らした。

その後、舞は宮沢家に引き取られることになる。

第33章：暖かな温もり

舞は大通りをまるで魂が抜けたように下を向きながら歩いていた。

いつのまにかポツポツと降ってきた雨に、道行く人々は天気予報で雨を予報していたせいか、傘をさし家路に急いでいる。

降り始めた雨は一雨ごとに舞の心と体を冷やしていく。

優はどう思っただろうか……。

きつと、軽蔑しているに違いない。

優には、優だけには知られなかった……。

母親のあの言葉……。

『この子が母親の男を寝取った事があるってこと』

舞はこの時初めて、母親の美樹を恨めしく思った。

ひどい扱いを幾度となくされた舞だったが、これほどまでに憤りを感じたことはなかった。

あきらかに舞への嫌がらせでしかない。

なぜ、あんな事を優の前で言ったのだろう。

16年も前の事を今だに恨みに思っているということか。

舞は友也との事が尾を引いているのか、初めて体を重ねる相手には恐怖感と嫌悪感が拭えないでいた。

それは、優に対しても同じだった。

良太に挑発され強引な優の態度に少し怖さを感じたのだ。

しかし、舞は自らその殻を破るため自分から唇を重ねた。

そして、目覚めた朝。

人を愛しく思う気持ちや温もりを初めて感じる事ができたのだ。

それは美樹と再会する事で、優と過ごしたほんの一時の幸せが音を立てて崩れて行くような気がした。

雨が降るなか、長い間歩いていたが気がつくとアパートに帰っていた。

ずぶ濡れのままアパートの階段を上がると、舞の部屋の前に優が扉に背をもたれかかるようにして立っている。

舞の姿を見つけると駆け寄ってきた。

「舞！……ずぶ濡れじゃないか……。早く体を温めないと風邪ひくぞ」

優は舞の肩を抱き寄せ部屋へと歩き出そうとしたが、舞はその場から動かなかった。

「……………舞？」

「……………私、……………優とは一緒にはいられない……………」

「……………」

「……………聞いたでしょ。……………お母さんの……………言葉……………」

少しの沈黙の後

「その事なら、後でゆっくり話をしよう。今は冷えた体を温める方が先だよ」

優のやさしい声がズキリと胸を突く。

「……………しないで」

「……………」

「やさしくしないで！」

舞は優の腕を振りほどいた。

「軽蔑しているでしょ！ 母親の男を寝取るような女なんて！」

もう、どうでも良かった。

母親からの暴力よりも、もっと心に引つかかっていた事。

無理矢理男に体を触られた事で自分の体が汚れたような気がしていた。

そんな自分を優に知られてしまい、二度と幸せなんて手に入らないと思った。

優にやさしくされれば、それだけ惨めになるだけだ。

舞は自分の部屋へと歩き出すと、優に腕を掴まれ腕の中にきつく抱きしめられた。

「軽蔑なんて……、するわけないだろ」

優の声は切く辛そうに聞こえた。

「お母さんとは中学の時から会っていなかったんだろ。どう考えたって中学生の女の子が出来ることじゃない」

優は舞の髪をやさしく撫でた。

「俺は……、どんな過去があっても……舞を好きな気持ちはかわらない」

優は腕の力を緩めると、少し体から離し手を舞の頬にそっと触れた。

「ずっと……、ひとりで背負ってきて辛かっただろ……」

「……………」

「子供は望む望まないにかかわらず、どうしても親の人生に振り回

されてしまう事がある。　ましてや成人していなければ、それは逃げようとしても逃げる事が出来ない。　過去にどんな出来事があったとしても、それは舞の責任じゃないよ」

「……………」

「ちゃんと受け止めるから……、舞が抱えている辛い気持ちも過去も全部。なにがあっても舞の隣にいるから」

暖かい優の愛情が冷えきった舞の心を包み込む。

舞の目から涙が溢れた。

ずっと……、辛かった……。

男に体を無理矢理触られた恐怖、母親に罵られた悲しさがずっと心の中に残っていた。

誰にも言えず、自分の心の中に押し込めてきた。

もし、誰かに話したとしてもきつと理解などしてもらえないだろう。

これは一生自分ひとりで背負っていかねばいけない傷なのだと。

心に蓋をして、自分自身も目を背けていた過去……。

自分の過去や辛かった気持ちを、こんなふうに誰かに受け止めてもらえるなんて思った事なかった。

「だから、俺を信じて」

舞は優の胸に顔を埋めた。

今まで感じたことのない優の大きな愛情に、溢れ出した涙は止まる事なく頬をつたって流れている。

優が舞をそっと抱きしめた。

優の腕の中は、親が子供を愛しむようなやさしく暖かな温もりだった。

この温もりを手放したくない。

舞は心の底からそう思った。

第33章：暖かな温もり（後書き）

第33章までご愛読いただきまして、ありがとうございます。

第34章からの更新はまだ決まっていませんが、出来るだけ早く更新出来るようがんばります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3991d/>

心暖まる場所

2010年10月9日02時37分発行